

---

# 狂った少女はただ笑う

真田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂った少女はただ笑う

### 【Zコード】

Z2726Z

### 【作者名】

真田

### 【あらすじ】

執行者 Z014 表裏比興

そんな肩書きを持つ執行者の少女。リア。そんな少女が魔都クロスベルにやってくる。

理由、それは…

「里帰りだけど、何か問題でも?」

元執行者のオリ主はそれなりにいるけど現役の執行者はあんま見ないなあ：自分が知らないだけかもしれないけど。なんてふと思い書いてみた二次創作です。興味のある人はぜひともクリック！

## プロローグ 夢の話（前書き）

どうも初めましてー。そうでない人はこんなにちは。真田です。

まず最初に。

これは前から連載してる小説で「ネタが思いつかねえええええええ！」ってな感じになつた時に、ちょくちょく書いていたものです。

そろそろたまり過ぎて数がやばくなり、執筆中小説内から必要なデータをサルベージするのがきつくなつてきた&このまま眠らせるのもなあ…と思い投稿したものです。

故にしばらくは安定した更新ができるが、ストックが切れれば恐ろしいぐらいに不定期となるかもしれません。

それでもいいという方はどうぞ！感想を頂けると嬉しいです。

## プロローグ 夢の話

最初に言つておくわ。これは夢の話。ほとんど毎晩見ている夢の話。

とつても大きな赤い水たまりがあるのよ

それをなめてみると鉄っぽい味がする。

それでこれは水じゃなくて血なんだって氣づくの。

私はそれに驚いて近くに何があるのかを見渡してみる。

そしたら、血溜りの中心に一人の女性の死体が転がってて、私はそれに近づいていくの。

そして、近くで顔を見るとそれがお姉ちゃんなんだってことに氣づく。

それがわかつて泣きそうになつてると、いつの間にか私は一本の長剣を片手に立つてるの。

その長剣からは血が滴り落ちていて、それに氣づいた私は剣の剣腹をじつと見つめる。そこに自分の顔が写る。

その顔や髪にはたくさんの返り血が付着してて、とつても汚らわしい。

それを見てから初めて私は周りを見渡す。

そこにはさつきのお姉ちゃんの死体ほどにもなくて、代わりにたくさんの死体が転がってるの。

そこで、私が殺したこと思い出す。そして、死体のうちの一つが  
壊つた。

コノ、ウラギリモノガ…

そして、何かが壊れたような音が響く

は……………は……………あはは  
は……………は……………は……………ああ……………は  
あはは  
は……………は……………  
は……………は……………  
は……………は……………  
アハハ

笑う。

狂う わらう

## 第一話 結構明るめな話

「すつ… さすがクロスベル…」

そう驚きの表情を浮かべたのはどこか浮世離れした一人の少女。真っ白な髪を腰のあたりにまで伸ばし、赤色の目をしていて、顔も十人中九人は可愛いと思うんじゃないかな?つてなぐらいに可愛い容姿をしている。服装は真っ白な着物のような袖の長い服で、帯の部分は鮮やかな赤色。下は赤のミニスカにピンクのニーソックス。という和風か洋風かどっちかにしたら?と言いたくなる服装だった。あ、ならない?そうでしたかすいません。

それはともあれ、その少女はあたりをもの珍しそうにきょろきょろと見回していた。例えるなら田舎から上京してきた田舎者だ。そしてそれは別に全部が間違いというわけでもない。

時刻はまだ昼ということもあり、そこはまさに都会といった感じの人通りの多さだった。高いビルがいくつも鎮座しており、目の前を横切つて行くたくさんの人。しかもたまに導力車も通つて行く。

「導力車って初めて見た…」

そんなことに軽く感動を覚える。昔と随分変わったな…と寂しさ半分物珍しさ半分といった心情だった。子供のころはここらへんに住んでいたのだが、ちょっとした一軒でアルテリア法國に引っ越ししているのでざつと八年ぶりとかそのぐらいだつたはず。

そしてその少女は初のクロスベルの景色を十分に堪能してから、これからすべきことを思い出す。

「大きな鐘の前とか言つてたっけ…」

まず、彼女はしばらぐここで生活するつもりでいた。そのためにはまず家をどうにかしなければなるまい。残念ながら昔住んでいた家などは当に売り払ってしまっている。さすがに好んでホームレス生活をしたいなどとは思わない。

そこで彼女の所属している組織・ぶっちゃけると「結社」なのだが、あの中では一番話の合うカンパネルラが何らかの便宜を図つてくれたらしく現地で案内してくれる人間を紹介してくれることだ。カンパネルラが見せた好意に正直『熱でもあるんじゃないかな?』『実はドッペルゲンガーだったりするのじゃないだろうか?』などと思いつつも、人からの行為をわざわざ無下にする氣にもならなかつたので、とりあえずお願ひしておいた。実際にドッペルゲンガーかと聞いてみたら「心外だなあ」とか言いながら笑つてた。そしてその待ち合わせ場所がここであるのだが…

「…あの人かな?」

その中央に鎮座している、大きな鐘の前のベンチで座つている青年を発見する。…そして彼女は深呼吸をした。なにせあの時紹介してくれたのはカンパネルラだ。絶対普通の人間ではない。あるはずがない。絶対に面白がつて何かを仕掛けたに決まつている。星杯騎士団の守護騎士なんて可能性なんかは濃厚である。

ここで考えていても仕方がないと思い、声をかけようとしたが先に青年のほうが気づき声をかけてくる。

「こんにちわ。クロスベル警察の者ですが…」

なんで警察?カンパネルラはいつたい何をした?なんかの犯罪の濡れ衣かぶせられた?

「貴方が支援要請を出されたリア・ルアルティさんでしょ？確かにクロスベルの案内をしてほしいという内容でしたが」

「えーと…ちよい待ち」

支援要請…？

と少女…リアは幼いころより教え込まれた知識やら、生まれつき持つている頭の回転の速さを回転させ…納得した。

たぶんこの人が友人の紹介したという案内人というのであつていいのだろう。用意したというか警察に頼んだ…なんで警察なのかという疑問は置いておこう。カンパネルラの考えることはわからないし。しかも今のところ裏もなさそう…

え…？

…何もなさそう…だと…

明日は嵐だ…今日中に住むとこ決めないとけないといけないよつだ…

「どうかしましたか？」

「あーいや、何でもない。ちょっとほーっとしてて…改めまして。私が依頼を出したリア・ルアルティ。今回はよろしく

リアはどこか気の抜けたようなへらへらとした笑みを浮かべる。

「（じ）寧にじじつも。クロスベル警察特務支援課。ロイド・バーニングスです」

「あ、別に敬語じゃなくて結構いいわよ？ 同い年ぐらうだろつ」

「いえ…さすがに仕事ですし…」

「私は気にしないからさ」

とこうと、ロイドといった青年は少し表情を和らげて言った。

「君がそういうのなら……短い間だけよろしく」

「ん、こちらこそ……さつそく案内してくれるかな？まずは家を探したいから」「

「家を探すって……どこか親戚の家に泊まるとかじゃないのか？」

「違うわよ？一人暮らしになるわね」「

「そうなのか……」

ふーんという表情をしつつ、ロイドはリアと視線を合わせる。

「それじゃあ、行こうか。家ならまずは行政区に行ってみる家のタログをもらってきた方がいいと思うけど……」

「せこらへんはお任せするわ。あ、でも余裕があつたりこの町の見どころの案内もお願いしていい？それと家はなるべく安いところがいい」「

「はは……ア解

「へえ…普段は四人なんだ」

「そうなるかな。今日は全員で行動するよりも二、三の方が効率が良かつたから別行動だけね」

そんな雑談をしながら今は東通りに来ていた。行政区で空き家のカタログをいくつかもらつてきたのでそれをもとに家を周りながらクロスベルの案内をしてもらつている。

「露店とか多いのね」

「結構新鮮な野菜とかが手に入るから結構繁盛してる。あ、あとそこが遊撃士協会になるかな」

と、ロイドが指さした方向の看板には確かに遊撃士協会と書かれていた。あ、そういえば…

「ヨシュースが今ここに来てるんだっけ?」

「ヨシュース…?ああ、ヨシュアとユーステルの事が?」

「うん、そんなとこ」

ロイドが何か聞きたげにしていたが、それよりも露店に面白そう

な物を見つけたので、そむき足を進める。

「こがトマトだとなんてこつものを出荷していのんだリベル…と、いつもは共和国の…」

「…トマトとはその名通りリベル産のものです。これがトマトの事だ。あれで作ったジユースをよく罰ゲームと称して飲まれたなあ…ちょっとトラウマを刺激された…あ、でもちょっと寝かしいしな…どうしようか…」

「へえ…そいつのつて結構詳しいのか?」

「ま、いろんなところ行つてきたからそれなりにいろんなことは知つてゐるわよ。帝国のおいしい料理とか、共和国のおすすめの観光場所とか…あ、面白そうなのでいえば『銀』のファンタスジックな噂も聞いたことがあるわね」

と、口がトマトを置いて店の前で立ち止まりながら向気なくつぶやいた瞬間。ロイドの顔色が変わった。

「『銀』の事を知つてゐるのか!?」

「知つてゐるところ…共和国の人間なら誰もが…つてほゞじやないけどそこそこ有名な話よ?伝説の凶手なんて呼ばれてる。それがどうしたの?」

そうこうとロイドは数秒だけ考えこんでから少し口を濁してから言った。

「…おまつと警察の方で追つてゐる事件に銀が関係してゐるかも知れないんだ。それでその『銀』の情報が欲しくて、情報を集めてゐるところだ。よかつたら聞かせてくれないか?」

「へえ…どんな事件なの？」

「…そういうことは守秘義務があるから言えないんだ。すまない」

そんな警察の立場としての言葉に、リアは別にそこまで興味があつたわけでもなかつたので特に追及する気もなく、にがトマトを手に取りながら言った。

「ふーん…ま、いいわ。といつても私も大したことは知らなくてのよね。私の知つてることと言えば『銀』って言つのは伝説の凶手…まあ暗殺者とか刺客とかそんな感じの人の事。その人は何世紀もの時を生きて暗器や札を駆使して狙つた獲物は確実に葬る…とかいうの私の聞いた話ね」

「何世紀って…眉唾物じやないか？」

ロイドが聞くとリアははにがトマトの購入を本気で検討している様子でありながらも質問に答える。

「そうでもないわよ。知り合いにちょっと裏社会関係の人�이て、その人曰く『銀』って人に依頼を頼めばほぼ確実に依頼を完遂してくれるらしいし」

「…え…」

あつさりと裏社会というセリフが出てくるとは思つていなかつたのかロイドの顔が微妙にひきつっている。やがて戸惑い気味に問いかける。

「その人とは…その…大丈夫なのか？」

「いい人よ。それと銀の事だけど…何千年生きてるとかつてのはなんかカラクリがあるんでしょ。まあ、『銀』は本当に何千年も生きる化け物だった！！みたいな展開があつたりするかもしれないけど」

「いや、そんなに生きられないだの」

苦笑しながらロイドが言つとコアはふだけた様子もなく真顔で答える。

「やつは…でも世の中って不思議で満ち溢れると想つわよ。常に想で考えられない事つて結構多いんだから」

実際にカンパネルラつて全然年取つてゐるよつに見えないし。あれも不思議だよな…と心中で呟きつつ。やっぱり怖いもの見たさ的な感じで買つておこうとこうことでにがトマトの購入を決定し、気のよさやせつなお兄さんと元気を支払つ。

「それと『銀』が最近は黒戸とか言つマフイアに雇われてクロスベル入りしたみたいだけど…や、次行こ」

「君はいつたい何者なんだ…」

「ふふ。そこは秘密。ミステリアスな女性に男性は引かれるつてね」「や、そうか…」

「ま、冗談はさておき…次は旧市街つてところに行つてみたいな。あそこのマンションが格安じゃなかつたけ?」

とロイドに聞きながらやがトマトをかじつてみる。…  
くおおおおお…や、やつぱつ苦い…

「吐きそつ…」

「…大丈夫…か?」

「あんまし…好奇心は猫をも殺すとまじのじ…」

もうこれ買わない。と心に誓いつつ、2、3回深呼吸をして何か持ち直す。と、さりげなくロイドがジユースを差し出してくれた

のでそれを一気飲みし口直し。

「ふう… ありがと

「どういたしまして。ところがそんなに苦いのか？」

食べてゐる？

と、まだ一口しか食べていない… というかこれ以上食べたくない  
にがトマトを差し出す… いや押し付ける。いやもう代わりに食べて  
くださいお願ひします。

「それじゃあ、一口だけ……」

と書いてロイドも怖いもの見たさなのかパクリと一口。と、そこで今更ながらリアは気づいた。そしてちょっといたずらっぽい笑顔を浮かべ、わざとらしく呟いてみる。

「これって関節キス…？」  
「～～～！？」

のどに詰まつた！？

「あ、ちょっと…大丈夫!? そこのお兄さん! そのお茶頂戴!」

まさかそこまで慌てるとは思わなかつたリアが慌ててお茶を購入。それをロイドに差し出す。それを一気に飲み干していた。

「はあ、はあ……ふう……」

「えと…大丈夫?」

一  
何とか

と並んでロイドの顔が少し赤い。それを見て悪戯っぽく笑う。

「顔赤いよ？ どうしたのかな～何を考えたのかな～ほれほれ、お姉さんに言つてみ？ 可愛い女の子と間接キスできて嬉しいとかわ」「あ、え、あ…と、とにかく！ 次は旧市街だつけ？ さつそく行ってみようか！」

「…………ま、いいわ。それじゃあお願ひ」

顔をそむけ、背中を見せてやつと歩きだしたロイドをリアはこぎながら追つた。

## 第一話 あじせつとか墓参りとか

結局のところ新住居は旧市街にあるマンションの小さな部屋に落ち着いた。最後の最後までロイドは治安が悪いからと心配していたもの、安いし上に特に不満があるわけでもない部屋だったのでここに決めた。というか一般人が彼女を襲うこと=死亡フラグである。いや冗談ではなく。

「ありがとう、ロイド。助かったわ」

「いや、これも仕事だからね。困ったことがあればまた連絡してくれ」

「うん。了解。遊撃士よりも早くした方がいい？」

「ははは……」

と、最後に苦笑いを浮かべながらロイドは去つて行った。さて。

「どうしようかなー……」

まあ、ここクロスベルに来たのはただ単にリアが所属している結社で結構大きな一件がリベルで少し前に終わつたのだ。ずっと自分は裏方で表舞台には一切出なかつたけど。そしてしばらく暇でどうせ行きたいところもないし故郷に帰るかなと思つただけであり、しばらくはここに滞在するつもりだ。と、思いながら安物の部屋ゆえに別にふかふかであるわけでもないベッドにダイブする。さて……どうしようか……と、脳内でやるべきことというワードで脳内検索をかける。しかしそれで出てきたのは案外少なかつた。ま、とつあえず……

「…行つた方がいいわよね」

まだ一度も行つてないしな……などと思ひながらベッドから起き上がる。その前にどこかで花買つてこないと……などと簡単な予定を立てる。

「ついでこね隣さんにおひやうでもしていよっかな」

礼儀は大事だよね、うん。

リベルを大混乱に陥れた犯罪組織の執行者とは思えないことを呴きながらリアはベットから体を起した。

「いなかつた……」

お隣さんは留守にしてた。噂では氣立てのいい若い娘さん。巨乳。ずっとどこかに出かけていて家にいることは少ない。らしい。仕方ないので出直してくることにしよう。それでも他の何人かの人間には挨拶してきたのだが。いまどき礼儀正しい子だと穏やかなおばあさんに褒められた。うん。褒められると結構うれしいものがある。

「～～

と、少しだけ機嫌よくマンションのドアを開き外に出ると…

「てめえ！ サーベルバイパーなめんじやねえぞ」「アリ...」

「つふ…これだから野蛮人は…」

今にも喧嘩をおつぱじめそうな一つの集団があつた。片方は赤いジヤージ。もう片方は青いフードつきのジヤージ。

「平和ねえ  
」

かなり一般人よりかけ離れた感想を漏らしつつその集団を避けながら歩き出す。自分から厄介ごとに巻き込まれる理由はない。と、そんな時。

「やあ、久しぶりだね」

?

そんなリアに涼しげな男の声がかかる。こんなところに知り合いがいるはずが…と思いながら後ろを向く。そこには青いジャージの集団を遠目に見ていたらしき涼しげな男が…

ツボに入った。

「こきなり笑うつていつのはなかなか失礼じゃないかい？」  
「う、うめふつくくい、いやだつてつふはははつわ、  
ワジくつふくくな、何それとに、似合いすふふくくく」

そこに立っていたのは身彫らう蛇の天敵。永遠のライバル？ナルトとサスケ？いやこれは違うか…まあ、それはいいとして、星杯騎士団の守護騎士とよばれる結構なお偉いさん。ワジだつた。

ツボに入った理由。それは服装にあつた。似合わないわけじゃない。むしろ似合ひすぎてた。普段と違つてなんかきつちりした服じゃない、腹チラしているというイケメン以外の男が着るには危険な服だといつのに。おつそろしいくらいく似合ひつてた。それが逆にツボに…

「やれやれ…一応僕らは敵同士のはずなんだけどね」

「まあ、細かいことは気にし…ふふ…っくく、はははは」

やばい。これ普段ならシリアルでないよつたシチュエーションなのに。まさかこれも作戦！？いつやつて笑わせて戦えなくする気！？…んなわけないか。アホらし。

「ぜえ…ぜえ…ふう…よし。落ちついた。改めて久しづりね。ワジ君」

「そうだね。あれ、少し身長も伸びた？」

「うーん…どうだろ。いつのつて自分ではわからないしね…あ、アッバスもおひさー」

友好的にあいさつしたのに微妙に殺氣を出しながら戦闘態勢を取られた。あいさつはしつかりしないとダメだよ。人間第一印象つていうのはものすごい大事なんだから。いや初対面じゃないけど。

「ま、いつか…それはそれとして。こんなところでなにしているのよ？」

「ふふ…今の僕は『テスタメンツ』っていう不良のヘッドだよ」

「どつちの？」

「青い方」

ワジが指さしたほうを見る。

「各回一聖戦の準備だ！」

聖戦つて…

「神父さんが何やつてるのよ… 聖職たりじやない？」

「ふふ… まあ、いいじやない。それで、君は何しに来たんだい」

「微妙にはぐらかされた気はするのだけど… ま、いいわ。大したこ

とじやないしね。ただの里帰り」

「… つふ、アハハハハハハハ… ! ! ! !

今度はワジがツボつた。

「ふふ… いやいや、執行者が里帰りつて… なかなか面白いジョークだね」

「うん。これなかなか腹立つね。殴つていい？ つか殴るぞ」

「お互いさまじやないか」

「… それもそうね。ま、ここであなたを殺したとしても大して得しないし」

真顔で物騒なことを言つコアに対しアッバスは警戒を強める。とい  
うかアッバスの反応が普通なのであって、何度も本気で殺しあつた  
こともあるこの一人が和やかに談笑しているほうがおかしい。

「ま、そういうわけだ。ここはお互に知らぬふりしようよ。こ  
んなところでそんな不良のヘッドなんかしてることはなんか訳  
ありなんだしょ。…… そういえばここは教区長つてあなたたちの事

嫌いだつたけどそれと関係あるのかしら?」

「ふふ、さすがは『表裏比翼』鋭いね」

「それで?」

「いいよ。僕だってこんなとこでいきなり殺り合いたくはない」

「…そつか。それじゃあ、今からただの『近所さん』になるわけね。

よろしく」

リアは和やかに笑みを浮かべる。友好的<sup>アーバン</sup>か愛想笑いにもとれる普通の笑み。

普通としか表現できない、適度に不自然なとこのある笑み。

それを見てワジは言つ。内心では警戒しながらそれをおくびにも出で<sup>アーバン</sup>に愛想笑いを浮かべる。

「フフ、<sup>アーバン</sup>」

「びつくつした…」

まさかあんなところでワジに会つとは思わなかつた。本氣でなんでいるの? とはいえて判断できるほどに情報も集まつていないので一旦その思考は打ち切る。まあ、一応整理はしておこう。まず、星杯騎士団とは? から説明しようかと思う。誰にかつて? おいおい、野暮なこと聞くなよ。そこは流すのがお約束だろ、ジョニー。

まず前提としてアーティファクトと書う大昔に作られた古代遺産と言つものがある。それは物によつて効果は違うもののものすつごい力を持つていて。そんなものを「一般人が持つていいもんじゃねえんだよ」「ラーダから俺らによこせや。なに、素直に渡せば痛い目みすにすむぜ?」みたいな事をやつている組織だ。ちょっと乱暴な言いようだがあながち間違つてはないと思つ。

まあ、言い分も分かるんだけどね。確かに誰かがしなくちゃいけないことではあると思う。

そんな組織と何故敵対しているかと言えばだ。

まあ、アーティファクトを保持してゐるんだよね。『身喰らう蛇』つて。といふか星杯騎士団とは別で自分たちの目的のために使つためだから、星杯騎士団とは真つ向から対立するような関係になつてしまふ。私利私欲のために使う人間からアーティファクトを没収するための星杯騎士団と、私利私欲のためにアーティファクトを集める結社。対立しない方がおかしい。

と、そんな関係でワジを含め守護騎士とは数回殺りあつた。全部適当に逃げたけど。

以上。説明を終わります。

「ケビンじゃないのはよかつたけどさあ

と、呴きながら、彼女は教会の敷地内にある墓場に佇んでいた。  
うん。星杯騎士団のクロスベル支部ともいえるような場所にだ。まあ、『』のお偉いさんは星杯騎士団のことを嫌つてゐるし何とかなるだろう。

そんなリアの手には三つの花が握られておりそれぞれ白、青、黄となつてゐる。

「……つる覚えでしかないけど……あつてるかな」

クロスベルでの風習で墓に沿える花はこの三色の花だと決まつていた。  
たぶん…きっと…おそらく…会つてゐるといいな…

だんだん自信がなくなつてきたが間違つていたとしても出直すのは面倒だつたので気にしないことにした。気にしたら負けという奴だ。たぶん嘘だ。

そんなくだらない自分の思考にリアは苦笑を浮かべつつ、改めて目の前の光景を眺める。彼女の前にはたくさんの墓石が視界いっぱいに広がつていた。

「えーと…順番に見ていくしかないわね…」

約十年ぶりに来た場所なので忘れていたり、いくつか新しい墓石が建てられていたりと目的の場所がわからない。幸い時間はタップリがあるので一つずつ順番に石に刻まれた文字を読んでいく。  
そして半分くらい確認したころだらうか。

「見つけた…」

そこには『セレナ・ルアルディ 』に眠る』とだけ書かれていた。  
持つてきていた花をそつと添える。

「久しぶり、お姉ちゃん。亡くなつてから十年間。一度もこれなくていいめんなさい」

「もひ、涙が出てくる」とはない。長い時間が経つたから。風が吹き、リアの純白の髪が風にもてあそばれる。

「いろいろあつたんだよ。ゼムリア大陸の全国各地を回つたりしてね。なんというか…ほんと国によつて雰囲気つて違つんだね。同じ人間なのに…驚いたよ」

「そんなどうでもいい話。しかしそんな言葉にも返事はない。当たり前だ。これはただの大きな石なのだから。そんなの…分かつてる。分かつてるんだ」

しばらくの間じつと墓石を見つめる。

「なんで…お姉ちゃんだったの…？」

「世の中お姉ちゃんよりもダメで、くだらなくて、生きている価値もないような糞みたいな人間がたくさんいるのに。なんでそんな奴らじゃなくてお姉ちゃんなの？なんで死んじやつたの？お姉ちゃんが何かしたの？何か悪いと/orしたの…？」

「世の中お姉ちゃんよりもダメで、くだらなくて、生きている価値もないような糞みたいな人間がたくさんいるのに。なんでそんな奴らじゃなくてお姉ちゃんなの？なんで死んじやつたの？お姉ちゃんが何かしたの？何か悪いと/orしたの…？」

今まで一度も吐き出すことのなかつた思い。

すべて吐き出す。

そして、自分のしゃべっていることに可笑しさを覚えた。今の自分はその生きている価値もないような糞みたいな人間の一人なのに。

「もしもお姉ちゃんが生きてて…そして今の自分を見たら…叱ってくれた?…怒ってくれた?…だったら…いいな」

それは自分を愛してくれてる証明もあるから。でも、その答えはもうわからない。もう本人はいないのだから。

そして幾分落ち着いてくると、馬鹿らしい…と自分の事を鼻で笑う。何がしたかっただろう私は。

「…バイバイ。また来るから。今まで来れなかつた分。たくさん、たくさん」

そういうて。その場を後にした。

## 第二話 ちよい伏線と星見の塔へ

クロスベルのどこかにある一つの部屋。そこの中に一人の人間がいる。

両者一人とも全身を覆う黒衣のローブを身に着け、動物をかたどつた仮面をかぶつてるので顔はあるか性別や年すらもわからない。

「隊長。報告に上がりました」

「どうだつた」

隊長と呼ばれた人間に対し、おそらく部下なのであろう人間は、尊敬の念を込めた眼差しを向け報告を始める。

それは、様々な情報だつた。ルパーチュ商会の事、黒月の事（ハイコウ）、裏の情報から、遊撃士や警察への市民の目。そんな真面目な報告に交じつておいしい料理の店とか言つよく分からぬ物まで。統一性のないもの。

共通点は一つ。クロスベルでの事だと言つことだ。

そして港湾区のラーメン屋はつまいという報告を最後に従のほうは口を閉じた。

「聞けば聞くほど歪な場所だな…」

「……え？ おいしいラーメンの店を聞いてなんでそんな感想？」

「馬鹿者。今はシリアスパートだぞ。黙つてろ」

「…すいません」

それだけ言つて両者共口を閉じる。そしてその情報の分析というのは全くやらなかつた。

彼らは理解していた。自分たちは主の手足。命令された以上の働きはしないし、そんなことをしても成果を上げることなどできない。

動くのは俺たち。どう動かすかを考え、利用するのが主だった。

「…最後に直接は関係ないのですが、一つ気になることが」

「なんだ？」

「星見の塔。及び月の僧院と呼ばれる場所で上位三属性が働いているようです」

「なに…？」

上位三属性と呼ばれるのは空・時・幻の三属性の事だ。

「具体的には？」

「まだ詳しいことはわかつていませんが、そこに出没する魔獣に対するアーツの効き方が異常だということです」

その確かに不可思議な報告に隊長と呼ばれた男は静かに数秒間黙考する。

「主は、おそらく何人かを調査に向かわせようと指示するだろ。星見の塔には私が行こう。月の僧院とやらには三人、いけそうな者に準備させるよう。編成は任せる。以上だ。下がれ」

「つは！」

そう返事をし部下と思わしき男は半透明になり虚空に消える。そんな不可思議なものを見ても隊長はいつもの事だとでもいうように平然としている。

「魔都クロスベル。なかなかお似合いな名前じゃないか」

そう無感情に最後に呟き、黒衣の男も虚空へと消えた。

時と場所は変わり。

「だから私じゃないって言つてるでしょ。冤罪だぞー…訴えてやる！」

「それじゃあ、あなた以外に誰がいるんですか？」

「知らないわよ。たまたまタイミングが悪かつただけよ」

そんな会話をしているのは一人の女性。片方はリア。もう片方は警備隊の制服を着た女性だった。名をノエルと言つらじい。そもそもここは星見の塔と呼ばれる場所の入り口であり、入り口に立てられていたバリケードは完全に粉碎されている。

「だから、私がここに来たのはただの興味だつて言つてるでしょ。来たら壊れてたのでラッキーってことで入っただけだつて、ね？納得してよ」

「そんなウソ信じられるわけないじゃないですか。それ以前にここは一般人立ち入り禁止です」

「ほらほら、そんな厳つい顔しないでさ、もつと笑つて笑つて。しかめつ面でいるのは損だよ？」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「それは永遠のミステリー。少なくとも私ではないわね」

わけのわからない」とを言つコアだつた。

そもそもどうしてこうなつたかと言えばだ。今日は墓参りに行つた翌日。リアは、ちよつと気になることを聞いたのと、ただ単に暇だつたこともありこの中を探索してみようといつ氣になつたので来てみたら、入り口をふさいでいたのであるうバリケードが粉々になつていた。

常人なら『なんだだ?』みたいに多少疑問に思うであろうこの状態を見たリアは「ラツキー」などと言つ軽い感想を抱きつつ中に入ろうとしたが、

なんかいるのね。後ろから装甲車が走つてきてるのね。しかもなんかそこの女の子止まりなさいとかスピーカーで言われるのね。しかもこの場には壊れたバリケードと、中に入ろうとしているリアがいる。

そんで「バリケードを壊して一般人の立ち入り禁止区画入ろうとしている不審者」と言つふうに勘違いされて今職務質問を受けていりといったところだ。というか不法侵入自体は事実だつたりする。

そんな感じでかれこれ十分ほど不毛な言い争いをしたころだらうか。そんな時に第三者の声がかかる。

「どうしたんだ? 豊島

「あ、皆さん。お久しぶりです」

「あれ、ロイド? どうしたの」

そちらを見るとロイドを筆頭とした四人グループがいた。知つてるのはロイドだけだけど。昨日言つてた支援課のメンバーだろうか?

「ああ、誰かと思えばリアか。昨日は情報ありがと。助かったよ  
「いや、ただの噂話だし、お礼を言われるほどじゃないわよ  
「なんだロイド。この可愛い子と知り合いか?」

そつこいのは赤毛のチャランポランそつな男。それとロイドのほかには育ちのよわそつな同年代の女性。そして…自分より年下の女子。

青といつこは少し薄い水色の髪。

ペつたんこな俎板のような胸。

どこか冷めたよつな印象を受ける整つた顔立ち。

そぞぞじ高くない身長。

「抱きしめていい…?」「何言つてるんですか…」

その女子を見た瞬間にリアの目が変わる。アニメ的に例えれば星になつた感じ。リアは素早く女子の背後を取り、いきなり抱きしめ始めた。周囲はドン引きである。

と言つかドン引きしないよつな人間がいるだろうか?初対面の幼女といつてもさほど間違ひではない女子に対して、鼻息荒くして、迫り、いきなりを抱きしめる…これがもし中年のおつさんでだつたら確実にアウトだ。

女に生まれてよかつた！

今この時ほど、彼女が女として生まれてきたこと感謝したことはないだろう。

「おお…レンちゃんと十分張り合える抱き心地…」  
「離してほしいのですが…」

そんな普通の人間なら慌てる…というか軽く身の危険を感じるような状態でもその女の子はクールだった。冷静にその拘束を解こうとする。そんな抵抗を感じるとリアは素直に離れて行った。

「ケチ」  
「初対面の方ですよね？」

ぶーっと不満そうな表情を向けるリアに女の子は南極の氷びっくりの冷たさを誇るジト目で答える。クスン…何よ…ちょっとしたスキンシップじゃないの…

「ロイドさん。この方は？」

小さな女の子が唯一リアを知っているロイドに問いかけ、ロイドは昨日町案内をした事を説明する。そしてリアには、この人たちが警察の同僚だと説明した。

「ティオ・ブライターです」  
「ティオ…？」

復活したリアがそう名乗った小さな女の子…ティオの顔をまじまじと見る。可愛すぎて鼻血で…じやなかつた…あの時の…?

その事に関しては、今は関係ないので一回思考の隅へと追いやるとして、ほかの二人もすごいメンツだ。

赤毛でしかも苗字がオルランドの男。あれと同じ赤毛だし、ほぼ間違いない、あの化け物の息子さんだろ？…あれを一時期利用したことあつたけどマジで化け物だよ…その父親の弟もだけど。

それともう一人のマクダエルという名字の女性。たぶん市長の娘さんだろ？あの市長さんひげが立派だよね！

リアも端的に最低限の自己紹介を済ます。

「ど、それいい」として…曹長とコアはどうしたんだ？なんか険悪な雰囲気だつたけど…」

「冤罪をかぶせられそうになつてゐる。ほら、ロイド達警察の出番よ！いや、それ以前に男ならか弱い美少女が困つてたら助けてあげないと！」

「この人がバリケードを壊して侵入しようとしてたので…」

「だから、壊してないつて…」

「ああ、ほらほらリアも落ち着いて。俺たちにも分かるように説明してくれ」

そんなロイドの声にリアは何度か深呼吸をしてから、ノエルとともに説明をし始めた。

（事情説明なう）

「ねえ…それって…」

「うん…俺もたぶんリアじゃないと思つ」

「どうして？」とですか？」

育ちのよさそうな巨乳…じゃなかつた女性…ヒリイとロイドがそういう。ノエルがなぜかと聞くと、ロイドはその事を説明しはじめる。

? イリア・ブラティエという大スターに銀と名乗る人物が不吉な手紙を送りつけ、それを支援課で調査することに。

? そしていろいろあって、今日の朝『銀』から挑戦状? みたいなのが届き色々なところを回つた結果今ここで特務支援課を待ち構えているといつことが分かつたらしい

? そんでもってたぶんそつちが原因じゃね?

てな感じの内容だった。それを聞いたノエルは特に疑つこともなく、リアを申し訳なさそうに見る。

「そうですか…えと、リアさん。すいませんでした」

「あ、いいよいよ。女の子だし。それじゃあ、私は行くわね」

と極めて自然な感じで背を向けるリアをそのまま見送り、さて、俺たちも行くか! ってな空気になつたといひで…

「待つた」

何か違和感に気づいたロイドが止めた。

「んー…どうかした?」

「バリケードを壊したのが君じゃないとはいっこは一般人立ち入り禁止だ」

「えー…いいじゃん、別に」

「ダメだ。危ないだろ」

危ないのはリアではない。襲つた魔物の方である。

「大丈夫だつて、それなりに戦えるから。自分で言つのもなんだけ  
ど結構強いよ」

「さつきか弱い美少女が何とか言つてなかつたか？」

「ええい！人の上げ足ばかりとつて！これだから若いのは…」

「いやいや…」

そんな適当な軽口をたたきながらリアは太ももにつけているホール  
スターと腰につけている鞘からから愛用の拳銃と長剣を取り出す。  
長剣は黒色。もう片方の拳銃は白で統一されている。しかし、白い  
拳銃の銃身の下にはただの拳銃にあるはずのない刃が仕込まれてお  
り、日光を反射してキレイに光つっていた。

「拳銃…？」

「いや、銃剣じゃねえか？」

「そ、ランドル…ランディさん正解。これとアーツが得意かな。ま  
あ、ぶつちゃけ器用貧乏」

あつぶねえ…本名で呼ぶところだつた…その銃剣と長剣をしまい  
ながら改めてロイドを見る。

「というわけで。自分の身ぐらには守れるから大丈夫！」

「いや、だから…魔獣だけじゃなくて銀つて言つ伝説の凶手も待ち  
構えてるかもしれないだぞ？」

そのまま長時間不毛な進展のない言い争いを続け…

「はあ…分かつたよ。ただし危険だと判断したらすくなくともいつ

やー。」

「おへこみすけじめんやれ。」

ローベッドが頬負うした。

## 第四話（前書き）

東通りに立てるメイコンばかりなん可憐かわいい... 田市街で店番やつてるジンゴちゃんさも可憐こよねー

「おおー綺麗なところね…意外なことに」

中に入つて最初に出迎えたのは宙に無数に浮かぶ光。おそらく萤だろ。近年急激に発達したクロスベルでは見ることのできない物だった。リアはその光景を満足いくまで眺め、脳膜に焼き付けてから地面や近くにある手すりやらを慎重に観察し始める。

「んー…ほんどの人の出入りはなしだけど…つい最近…といつかちよつと前に一人ほど通つた形跡ありと…どちらも手練れっぽいけど、その中でも一人はヤバい…足跡に全く乱れもなく重心が安定してる…『銀』かね？」

「二人…？」

ロイドが驚きの声を上げる。

「ちょっと前に一人がここを通つたのは確かね。まあ、銀ともう一人は別口で入つた…といつ可能性はあるけど」

「そうか…」

「…なんでわかるのかしら？」

「よく見れば足跡とかそんな感じのものが見えるものなのによエリイ様」

「…何で様付け？」

「なんか雰囲気がお嬢様っぽい。実は市長の一人娘だつたりするでしょ？」

ハトが豆鉄砲を食らつたような顔を浮かべる。…そういう豆鉄砲って何？

「まあ… そうだけれど… わかるものなの？」  
「人を見る目はあるつもりよ。あと、ランディもなんか隠してる」と  
「… 何のことだ？」  
「いやだなあ。〔冗談よ〕冗談。それとも本当に何かあるの？」

ランディは舌打ちを一つ。そして微妙に空気が重くなる。

「…………」  
「ティオ? ビうしたんだ」

と、話題を変えようとでもしたのかさつきから沈黙していたティオにロイドが声をかける。

「… ビうやら…」では法則が捻じ曲がって上位三属性が動いている  
ようですが  
「へえ……」

リアもそれは入った当初から感じることはできていた。ただ、それに誰かが気づくとは思いもしなかった。

「ねえ、教会の関係者だつたりする?」  
「いえ、全く」  
「ふーん……」

教会のシスターとか神父とかだとそのようなものを感じるのは

必須スキルだつたりするのだが。表情の変化や、息づかい、体の細かい動き。それらを見てもこの少女が嘘をついているようには見えない。ただ、感應力が高いだけ…？まあ、いいや。世の中の事のすべてを理解できるわけもない。

そしてティオが説明する。

「はい。土・火・水・風それ以外に上位属性と言われる幻・空・時が加わっています。…つまり火や風に弱い魔獸はいても、上位三属性に弱い魔獸はいませんでしたが、その法則が捻じ曲がって上位三属性に弱い魔獸がいると考えられます」

「…お話し中悪いけど構えたほうがいいわよ？」

と言つて太ももあたりにつけてあるホルスターから銃剣を、腰の鞘から長剣を引き抜き、構えを取る。

「もうすぐそこそこ来てるから…ね」

それが合図だったかのようにそれは現れた。

「中世の鍊金術師がつくり出したオーバーマペット…？」

そう、その姿はあるで…

「アルフォンスさん?」

鋼を鍊金術で武器化する主人公の弟さんを曰大化したものだと思つてくれればあながち間違いじやない。それが一体ほど。

「来るぞー!」

ランディがそう注意を飛ばす。しかしそれ以前にリアは動いていた。

動いていたといつてもさほど激しい動きではない。白色のパーティで組み立てられた銃剣の銃身を右のオーバマペットに向けただけ。そして、引き金を引いた。それはオーバマペットが大きく後退するほどの威力を持ち、鎧のお腹にあたる部分もベコリとへこむ。しかし、ただの銃弾が飛び出たわけではなかつた。

「オーバルアーツ…?」

オーバマペットにヒットしたのはアーツを思わせる赤色の光。それがレーザーのようになヒットしていた。

「ほーつとしないでーもう一匹は任せせるからー」

「あ…っよし、皆行くぞー!」

そのリアの声にハッとロイドが仲間たちに声をかける。その様子をチラリとみてから、田の前のオーバーマペットに視線を戻す。

「やっぱ、火はあまり効かないと」

そうつぶやくとリボルバーの形をしている銃剣の、本来なら弾丸を入れるための場所…シリンドーを一、三回回転させる。

そうしてから、イノシシのように突っ込んでくるオーバマペットに対し、引き金を引く。すると今度は黒い、時属性のレーザーがヒットしオーバマペットの顔面を打ち抜いた。

この銃剣の特長は弾丸の代わりにアーチのよななレーザーを撃てること。しかもシリンドーを回転させることで属性も変えられるという優れものだった。

そして今、目の前にいるのは頭を失ったことで、視界が完全に失われたオーバマペット。

「戦技：釣り野伏せ」

釣り野伏せとは…かのカルバートよりそちらに東にある島国「ニホン」と言ひ國の軍人の一人、島津が得意とした戦法の一つだ。

まず全軍を三つに分ける。そのうちの一つを敵の前方に配置して囮となり、残りの二つを伏兵として左右に配置する。そして囮の部隊が敵軍と戦闘し、適当なところで伏兵を配置した場所まで退却する。

あとはそのおとを追撃してきた敵兵を伏兵と囮部隊で三方から包囲。上手くいけば相手が調子に乗っているところを奇襲できるのでかなり効果的。

ただ、自然な退却に見せねばならず、しかも戦場での退却は容易に部隊が瓦解しかねないのでかなり難度の高い戦法と言える。

そんな技名を叫びつつ、一息で視界を失った哀れな敵へと近づく。

「ハツ！」

一息で呼吸を整える。そしてリアは銃剣を敵の胴体に突き立てる。しかしさほど刃が長いわけでもないので貫くには至らない。でも、それでいい。銃口が敵の体内に入ってしまえばそれでいい。

そして、敵の体内から銃撃を放ち、アーツ制の弾丸、魔弾ともいうべき銃弾が相手を貫き、消滅させた。

ちなみにこの技名とさつき説明した戦法との関連性はこれっぽっちもない。ただ単に何となくリアが気に入っているだけである。

「次つ……！」

それを確認した瞬間にリアはもう一体のほうへと視線を受ける。しかしそちらへの加勢はいらなかつたらしく、そちらも「アーツ！」付いたところらしかつた。ほつと一息ついている。

「全部一人で……す」

「ふふん。もつとも褒めたまえ」

ノーハルの感嘆したような声にリアは大きくもないが小さくもない……いやどちらかといえば小さい胸を張り白慢げな声を上げる。

「おい、作者。やるかゴラ、アア！？」

「ゴメンナサイ。

「でも、確かにす」いわね……あなたいつたい何者なの？」

「実は私、身喰らう蛇っていう世界を裏から操る謎の結社の執行者なの」

「……あつそ」

エリイの顔を見て絶対信じてないなこの人と思いながらももともと信じるわけもないと思って言つたので気にしない。というか信じられたら困る。というか一部の人間を除き頭を疑う。大抵の人は冗談だと思うだろ？し、その冗談が本気だと悟れば頭の痛い人で終わるはずだ。

だつて若い子供がかかる恐ろしき病…中二病っぽい妄想だし。裏から世界を操る組織がいるのを知つてる？つて超真面目な顔で友達に言われたらどう思う？…つまりはそういう事だ。

「とにかく、この戦力なら探索できないわけでもなさそうだ。気を付けて進もう」  
「了解です」

そんなロイドとノエルの声を皮切りに探索が始まった。

「おお…古代語で書かれた本つてところかな…つてかこれ『ゴーレムの作り方の本じゃね…もらつていつても…』」  
「ダメだ。勝手に持ち出していいものじゃないだろ」  
「ケチ」

ぱらぱらと流し読みしてから本棚にその本を戻す…と見せかけて  
こつそりとウエストポーチに仕舞い込む。帰つたらちょっと読んで  
みよう。作れそなうなら作つてみよう。

そしてなぜここに本があるのかといえば…なんでだろうね？探索  
してたら大量の本が眠つてゐる場所を見つけたのでリアが興味津々で  
ペラペラとめぐり始めたというだけだ。

そんなこともありながらも一行は魔獣を蹴散らしつつ進み、つい  
に最上階に到着する。

そこには巨大な天球儀と巨大な本棚があつた。しかしそれでも狭  
いと感じさせることはなく、今まで通つてきた場所と違いがらんと  
した広い場所だつた。…なんか人の隠れてる気配が一つあることに  
リアは気づいたが、両者ともにいるといつだけで場所が良くわから  
ないのでとりあえず無視。用があるなら勝手に出てくるだろう。  
と思つた矢先に。

「フフ……。古の鍊金術師どもが造つた夢の跡といったところか」

本棚の上から声が響く。そちらを見れば黒装束に仮面をつけた一  
人の人間がいた。…男？女？どつちだろ…全身が隠れてて体格も分  
からないし、声も作つてるし、仮面で顔は見えないし。

「お前はつ…」

「黒装束に仮面…」

「出やがつたな…」

「フフ、初めまして。特務支援課の諸君。まあ、招かざる客が今日  
に限つて多いようだがな…」

と、ノエルとリアを見ながら言つ。

「私はただのサポートです」

「私は別にあなたに用事はないし…用事が終わるまでそこで本読んでるから頑張つて。と言いたいところだけど…まあ、乗りかかった船だし混ぜてもいいわよ」

軽口をたたきながらも、いつでも動けるよつこ重心を落とし、軽く全身に力を込めておく。

「まあ、貴様らだけではないのだがな…」

と、虚空を見ながら…まるで誰かがいるかのよつこふやいてから本棚から飛び降り、綺麗に一礼する。

「お初にお目にかかる。銀といつものだ。まずはじままで『足労賜つたことをねぎらおつ』

「……ああ、随分と引きずり回してくれたもんだな。ちなみに、塔にいる奇妙な魔獸はあんたが用意したものなのか？」

「フフ、……あれば元からこの塔の中に徘徊していた。腕を鈍らせないよう、歯(ご)たえのある狩り場を探してこの塔を見つけたのだが。中々どうして、面白い場所だ」

「あんたがやつたことじやないのか？」

と、あての外れたような顔をするロイド。

「まあ、個人でどうにかできる」とでもないでしょう

「そうなのよね…ねえ、さつきから気になつてるんだけどあなたつて男?女?どっち?女だったら正体は誰も知らない孤高の女暗殺者つてな感じで萌えるんだけど」

「萌え…?」

「別に知らなくてもいいわよ」

ローリー。君にその言葉は似あわない……と思つ。

そしてこういうタイプは仮面を取るとめっちゃ美少女と相場は決まって……つーなどと黙考していると銀が突如として武器を構える。それは黒塗りの大剣だった。あれ、萌えとか言つてるから怒つた？……そうよね……結構かつこよく登場したのに萌えとか言われたらおこるよね……

「どういつもつー？」

「弱き者には興味はない。お前達が、我が望みに適つ強さを持つているか………その身で証明してもらつぞー！」

「あ、そうですか。無視ですか」

リアの言葉は全面的に無視されたらしく、ヒリイの疑問にそう答える。それに対しても同は一斉に武器を構えた。

「やつぱりお約束ですか……」

「ねえ、気になつて今日の夜眠れなさうなんだけど。男なの？女なの？」

そうめんぢくやれりてひたてひティオと無視されてもめげずに質問するリア。

「くつ、多勢に無勢と言つたといつるだが……氣をつけろー。ローリー、すさまじく強いぞ！」

「どうやら手加減する必要はなさうですね……」

「ええ、全力で行きましょー！」

闘志をみなぎらせる一回を、轟きしやつに銀は見る。

「フ……良い闘志だ。それでは行くぞー。」

「ねえ、何で答えてくれないの?」

銀はその言葉を最後にロイド達に突っ込んでいった。

## 第五話　『銀』と書いて『イン』と読む不思議（前書き）

主人公の使つてゐる銃剣のイメージは小型版ベルゼルガー的な。

## 第五話 「銀」と書いて『イン』と読む不思議

「戦技：鶴翼」

そういうと同時に銃剣を逆手に握る。そして、向かってくる銀が彼女の間合いに侵入したその瞬間。長剣と銃剣の両方を振るい、十字の形に切り裂く。

しかし銀はそれらを間合いの外、空中に逃れて躲す。リアもそのぐらいで仕留められるとは思っていない。相手が躲すと同時に銃剣を持ち替えており、ピタリと照準を銀へと合わせる。そして三回ほど連続でトリガーを引き、白色の魔弾が銀を貫かんと襲い掛かった。が、それすらも空中にも関わらず体を捻つて躲す。

「何で空中で動けるのよ…」

なんてぼやいている間もなく銀はそのまま空から空襲してくる。それは落下のスピードも合わせたプラスされた破壊力を秘めリアに襲い掛かる。

「つづく…」

長剣で受け止めたはいいものの、一撃では終わらない。そのまま地上に足を付けた銀は綺麗な全身を使った動きで大剣で切り付けてくる。最初の一撃で痺れたリアの腕は満足に動いてはくれず防戦一方となってしまう。

しかし、銀の敵は目の前の少女一人ではない。

「おひあつー」

ランディが脇からスタンハルバートを叩きつける。それを後ろに跳ぶことでかわした銀にノエルとエリイの銃撃の雨が降りかかった。

「ありがとさん！」

「気に入んな、それより来るぞー！」

銀に視線を戻すと、銃弾の雨を避けながら何やらクナイのようないのを構える…いや、ただのクナイではなく、それに何らかの効果を秘めた札がついていた。

「爆雷符！」

それをエリイに向かつて投げつける。それはよける間もなくエリイに向かつて一直線に飛んでいく。

「嫌な予感が……アダマンガード！」

その声と同時にエリイの目の前に現れる半透明な薄くありながらも、すべての攻撃から術者を守る鉄壁の壁。札付きクナイはその壁に当たり、爆発することで事なきを得る。

……つてか爆発！？あれをもし食らつたら…クナイにつけられた札が爆発…つまり刺さった状態のクナイが爆発する…体内で爆発する…？

怖すぎると…エグすぎると…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお…！」

そんなリアの脳内事情はつゆ知らず。銀にロイドが突撃する。それを見たノエルとリアがそれぞれ右横と、左斜め前から同時に銃弾を浴びせて牽制する。

もはや牽制の域を超えている気がしないでもない威力を秘めた魔弾と銃弾が同時に襲い掛かる。しかしそれらを銀は軽々と躱し、大剣でいなす。しかし、それでもすべてを躱すには至らない。

脇腹あたりにノエルのサブマシンガンの銃弾がかすり、わずかに隙が生まれる。

そこにロイドが突っ込む。

「はあっ！」

「っち……」

脇腹にそのまま一発トンファーの先端が入る。しかし、入りが浅かつたのか、それをものともせずに大剣でロイドを斬り払い、トンファーをクロスさせてガードしたロイドをものともせずに吹き飛ばす。

「ふん。なかなかやるようだが……」

「ふつふつふ……まだだ、まだ終わらんよ……つてね」

「何……？」

突如。銀の周りの温度が下がり、突風が吹く。

「ダイヤモンドダスト！」

「エアリアル！」

エリイとティオによる一つのアーツ攻撃。

大量の氷の槍と風の竜巻は見事に銀の身体をとらえ、襲い掛かる。

氷の槍が次々と銀を突き刺そうとし、風の刃が銀の皮膚を切り裂く。それらを躰すことを諦めた銀は大剣の下に隠れるようにして構え、ガードの体勢を取る。

しかし、それでも全方位から迫るアーツを防げるものではない。いくつかが被弾し、決定打にはならなくとも確実にダメージを『え』る。そのアーツの猛攻が終わり一旦体勢を立て直そうとする銀。しかし…

しかし、まだ攻撃は終わらない。リアの戦術オーブメントが駆動していることに気づいたときにはすでに遅かった。

「いけええええええええええ！クリムゾンレイ！」

使うは火の最上級アーツ。

銀の頭上に現れるは灼熱の炎の塊。

それが火の巨柱となり、術者に危害を加えし者を無慈悲なまでに、完膚なきまでに焼き尽くす。

炎。轟音。爆発。

もうもうと大量の土煙が吹き荒れる。

それを見たロイドが言つてしまつた。

「やつたか！？」

「ロイドさああああああああん！それを言つちやダメ！生存フラグだからあああ！」

フラグの力なのかどうかは知らないが、突如一同の背後から銀が奇襲。リアはそれをぎりぎりのタイミングで受け止める…が、いきなりで、態勢が悪い。そのまま吹き飛ばされる。

「あやつー！」

中々に可愛らしげ悲鳴を上げ背中を打ちつける。抜け身を取ることには成功したので思つたまどのダメージはなく即座に立ち上がるが、結構飛ばされたらしく、リアを吹き飛ばした銀と戻りながらも交戦しているロイドたちとは結構距離が離れていた。急いで加勢しようとする…

「フフ…」  
「だああーもうー！」

横合いからの声に即座に振り向かれてまことに長剣を真横に一閃。それを銀も迎え撃ち鎧迫り合いとなる。

突如。ドクンッと音が鳴る。

「アハハハっ……！」

思わず出でてしまった笑いを次の瞬間には必死にこらえていた。

それは己の心に住む闇。

それは己の壊れた部分。

それを必死に抑える。

そして、仮面を被る。

次の瞬間にはいつものぐらぐらとした、氣の抜けたような笑みを浮かべていた。

「……あのアーツには結構自信があつたんだけど……何で生きてるのよ？というか何で三人いるの？兄弟かなにか？」

「フフ……影に攻撃しても何の意味はあるまい」

抽象的なことを……と思しながらもすぐさまピコンとへる。

「分け身？」

「「」名答。良く分かつたな」

それを聞いたリアは笑みを深め、視線を銀の後ろへと向ける。銀はそれを不思議そうに、そして警戒しながらそれを見つめた。

「私も今使ってるしね。わけ身  
「なつ！？」

おそらくこの戦闘で銀が初めて心から驚愕した瞬間だろう。先ほどリアが自分の後ろに視線を向けた、つまりは今後ろにいるのか？ そう思い込んだ銀は慌てて鎧迫り合いを解き、真横に飛んで逃れる。

しかし、焦つたがゆえに隙が生まれる。

そのスキを逃すリアではない。リアは銀の胴体へと長剣を突き刺した。しかし、躊躇してしまう。が、完璧に避けたわけではなく、結構な量の血がぽたぽたと零れ落ちる。

「つぐ…」

それを見て、そして言った。

「あ、わけ身つかってるのって嘘だから  
「…やつてくれたな…」

一応、似たような技を使える事は使えるのだが。

しかしそれでもまだまだ戦えそうな銀を見て、感心したように言う。

「しつかしさすがは東方人街の伝説の凶手ってところね。しかもこの人数相手に手加減してるときた」

「フン。手加減しているのはお互い様だらう?」

「何のこと?…って話してて思つたんだけどあなたは本物?偽物?と言つた男か女かの疑問にまだ答えてもりつてないんだけど」

「さあ…どうだらうな!」

やつと返事をしてくれたが答えになつていない。

銀の大剣がリアに迫る。しかしそれなりの量の出血のせいか動きが鈍つている。それでも十分早かつたがリアにとつては十分簡単にさばけるレベルにまで落ちていた。そんな斬撃を受け止め、その衝撃に逆らわずに後ろに飛ぶ。そして、ロイド達やり合つて偽銀の背後から不安定な態勢でありながらも銃撃し、完全に不意を突かれた偽の銀が消失する。

そして、最後の一人となつた本物だか偽物だか解らない銀を注視しながらすぐさまアーツの詠唱を開始し、リアの身体の周りを白い光で包む。

「これで…ダークマター!」

「ひづらも…電磁ネット!」

リアは銀の身体に圧力をかける重力の塊を出現させ、それで動きの鈍つた銀にノエルが静電気を纏つたネットが撃ち込み、短時間だが銀の動きが完全に停止する。

「皆、今のうちに!」

「おつし、任せろ!」

「了解です!」

そういうと同時に、ランディのスタンハルバートに炎が纏わせられ、ティオは魔導杖を変形させる。

「ぐらえ…クリムゾンゲイル！」

スタンハルバートから放たれた炎の衝撃波は狙いたがわず銀に殺到し、大剣によるガードを無理やり貫通させ、思いつきり吹き飛ばす。そして空中で勢いのなすままに吹き飛ばされていく銀を…

「エーテルバスター！」

ティオの魔道杖から放たれる、エネルギーの奔流が狙い撃つ。それが空中で吹き飛ばされている銀を直撃し、大爆発を起こした。

「はあ……はあ……どうだ……！？」

「いや……あれは……」

「ランティイとティオの渾身の攻撃によりようやく銀に片膝をつかせる。が、そのまま銀はピクリとも動かない。立つたまま死んだという弁慶を思わせる光景だった。

死んだように、動かない。しかし、あれぐらいで死ぬような使い手ではないと半ばリアは確信していた。まさか……ど、とある可能性に思い至ったリアは即座に周りの気配を探る。そして、銀の姿が揺らいだかと思いつとふと消えてしまった。

「なつ……」

「消えた……」

ランティイとリアを除いた全員が表情を驚きに染める。当然だ。別に銀じゃなくても目の前で人が何の痕跡も残さずに消えればそりやあ驚く。あ、よく見たら札が残つてゐる。痕跡が何もないというわけでもなかつた。そして札が残つたといつことは……

『そちらの一人はなかなか出来るようだな』

そして、少し離れた場所から、銀が虚空より姿を現す。

「い、いつの間に……！？」

「き、気づかなかつた……」

「戦闘中に分身だけ残してそこで高見の見物つてわけか。恐ろしく腕が立つようだが……あまりいい趣味とは言えねえな」

ロイドとノエルが呆然とつぶやき、ランティイが忌々しげに顔を歪

める。

「ふふ、気に障ったのなら謝罪しよう。しかしリア...といったか。貴様は気づいていたみたいだがな」

「...気づいたのは直前だし、もしかしたらつてぐらいの物よ...というか本当に何体分身作る気なのよ? 実はあなたも偽物だつたりしないわよね?」

「そう思うのか?」

「...まあいいわ。それで、まだやるの?」

ムスッとした不機嫌そのものといった感じの表情を浮かべながら問い合わせる。なんか全部がこいつの手のひらの上といった感じで全く持つて面白くない。手加減していたとはいえそれは相手も同じだし。

「ふ……まあ、いいだろ?」

銀はそう言って大剣をしまう。もはやことを構える気もないらしく、あまりいい雰囲気とは言えない物の、緊迫した空気は霧散する。と、ここからは特務支援課の仕事だ。正直顔もよく知らない大スターの事などあまり興味はない。彼女のイリアへの知識はなんかの大スターだということだけである。というかそもそも彼女が銀と戦闘を行つたのは、ただ単にロイドたちと一緒に成り行きでと言つだけなのだ。本来なら鬪う理由もない。

「ロイド、私は屋上に行つてゐる。終わつたら教えてちょうだい」

返事も聞かずに背を向け、屋上へと続く階段へと足を向ける。気になつていたことをわざと解決してしまつてしまつ。

「うーん…」

とうなるリアの目の前には大きな鐘が鎮座していた。それを見ながら珍しく難しそうな顔をしている。直感では何となくこれがこの場での異常…上位三属性が働いている原因のような気がする。こういう直観つていうのはなかなか当たったりするし…と思いつつ、とりあえずぐるりと回ってみる。特に変わったものはなし。ただのでかい鐘だ。

「うーん…」

再び唸り、田の前の鐘をじっと見つめる。…鐘、鐘…鐘つてどう使つ物?…鳴らすもの。では鳴らすにはじつある?

「呴く…だよね」

そういうわけで、とりあえずノックするような感じでトントンとたたく。変化なし。

といつわけでふうと深呼吸してから…

「はあっ…」

十分に勢いの乗った回し蹴りを鐘に命中させる。

カーン… カーン…

それと同時に鐘特有の大きく、どこか厳格な印象を与える鐘の音が響く。それをリアはわずかな変化も見逃すまいといった様子でじつと見つめる。そしてその大きな変化はすぐに訪れた。

「ビンゴ… かしらね」

突如鐘が青く発光し始め、彼女のこれまでの短い生涯でありながらも、濃厚な経験がこの鐘から靈的なものを感じとる。

「アーティファクトで間違いはなさそう… かな…」

確固たる証拠があるわけじゃないが、見た目がただの鐘にしか見えない物が光っているのだ。アーティファクトじゃなかつたらなんだという話になる。これがこの場の属性を狂わせているのはほぼ間違いないだろう。

「報告だけはしておこうかしら…」

この鐘を見ながら、深刻そうな顔をしてつぶやき… そして不機嫌そうに顔をゆがめる。

「とつあえずこの音を止めよう…」

この鐘かなりつねむこと。と言ひ事でじりやつて止めるかを考えてみる。

物理的に止める… 一人じゃ無理。三人ぐらいで四方から抑え込みでもしないと無理そつ。

「なら…」

薄く目をつむり、意識を集中させる。

「空に住みし空の女神よ以下略」

そんな、法術と呼ばれる術の詠唱。ふざけた詠唱。しかし、そんな詠唱とは裏腹にリアの手が白く輝く。

「縛」

同時に現れる白き鎖、それが鐘の周りへと出現し、その鎖は鐘を縛るかのように密着する。同時に、鐘を含めた光の鎖が白く発光し始め…

「止まつた…わね

ひつづつのは女の子にやりたいなあ幼ければなおよし。とかぼやきつつ、この鐘をあんまりむやみに鳴らさないことにしようと心に決める。そして、そろそろもどりつかな。と思ひながら下の階へと続く階段を降りようとすると…

銀がものす」とスピードですれ違つて屋上から地上へスカイダイ

ビングを決行した。

「なんで銀は結社にスカウトされてないのかしら?…」

そんな常人の理解の範疇を超える光景を見てもリアは平然としながらそれを見届ける。そして、それを追いかけるように支援課メンバー + が上ってきた。

「リア!銀はどこに行つた!?」

そんなロイドの問いに…

「紐なしバンジーをしてつたわよ」

「…はあ!…この高さをか!?!?」

リアは端的に一言で表し、ランディがありえねーとでも言いたげな視線を送る。いやでも、あんたの父親である『闘神』とかにもできそうじゃね?つてなセリフを飲み込む。絶対に怪しまれる。ちなみに私もできるけどね!つてなセリフも飲み込む。絶対に頭がおかしさつとか思われる。

とりあえずリアは呆然としている支援課メンバー + を見て言った。

「とりあえず…早く帰らない?」

その言葉が、今回の星見の塔の調査終了の言葉となつた。

あくまでここにいるメンバーの話だが。

## 第六話 序章のヒューローク的な？（前書き）

12月21日 一部改編しました。

## 第六話 序章のヒューローク的な？

星見の塔。数分前まで特務支援課メンバー+と銀が激闘を繰り広げた場所。そこに、虚空より一人の男が姿を現す。狐をかたどつたお面をかぶり、忍び装束と呼ばれる真っ黒な衣装を身にまとつていた。

「…………」

その男はあたりに何の気配もないのを慎重に確認しつつ、あたりを捜索し始める。そして一番最初に目についた巨大な本棚に歩み寄り、その中から適当な本を一冊だけ抜き出した。パラパラとめぐり始める。

しかし、その本には全く持つて馴染みのない「人が読める物なのこれ」と、言いたくなる文字で書かれている。

「読みぬな……」

まあいい。そう一人ごちながら、その本を棚に戻す。ほかにも床や階段も念入りに調べてみるものの特に仕掛けがあるようには見受けられない。

「ふむ…この塔自体には特に変わったものはない…だが、しかし。上位三属性の影響を受けた魔獣に屋上の鐘…か」

おそらく、あの鐘がこここの異常の原因なのだひつと狐面の男は見当をつける。さつき青く光つてたし。と、そろそろ報告に戻るか。そう思い至り、踵を返した時だった。

「隊長さん。月の僧院の調査報告つす」

「隊長。お疲れ様です」

と言いながら虚空より現れた一人。声からして片方は男で忍び装束と呼ばれるゼムリア大陸よりも東にある遠い異国の服を身にまとつていて、猫のお面をかぶつている。もう片方の女性の方は、くの一といった感じの微妙に露出度の高い衣装を身にまとい、同じく仮面をかぶつているのだが……みつしいのお面だった。ミシユラムで好評発売中です。

緊張感を粉々に粉碎する驚異のお面である。

そんな「仮装パーティ?」みたいな感じの二人だが、その二人の男女はその仮面を外し、狐面の男に素顔を晒す。それが彼らにとつてのルールだからだ。

男の方は軽薄そうな笑みを顔に張り付け、遊び入っぽい雰囲気を纏っている。不細工ではない。どちらかと言えばカッコいいと言える顔立ちをしている。

しかし、大抵の人間はこの二人一緒に見て、そのことに気づくことはないだろう。それよりも女性の方が目を引くのだった。女性の方をまず最初に見て大抵の人間がこう思う。

美しい。

女性はとんでもなく綺麗で整つた容姿をしていた。墨を落とした  
よつこ真つ黒な髪をセミロングにしている。大和撫子と言ひ表現が  
ピッタリだ。

しかし初対面の人間は次の瞬間には嫌悪の表情を浮かべる、そ  
う思わせるよう物があった。いや、あるのではなく、無いといった  
方が正しいのか。

その美しい女性は左腕がなかつた。左肩から先がないのだ。

しかし、そんな光景を見てもここにいる三人は誰も驚きはしない  
し、眉毛一本動かすことはない。そんな事は彼らにとつては些細な  
ことだつた。

それどころか隊長と呼ばれた忍び装束で狐面の男はハアつとため  
息を一つ。

「なあ……みつし……あ……なんでみつしいのお面なんだ？雰囲気ぶち  
壊しだらう……なんかその服装も微妙にエロいし」

「主が……『こいつの方がエロ可愛いからー』とこれの着用を義務付  
けられまして……」

「まあ、主がそういうのなら仕方ないが……まあエロいのに越したこ  
とはないしな」

「そうつすよね」

と、言いながら二人の男達はみつしい面の女性の胸元や、太もも

やうを堂々と視姦し始める。

「何やつてるんですか！！」

「どうもみつしい面の女性は恥ずかしいようで顔を真っ赤にしながら胸元を隠す。

「いやいや、あれつすよ。こうして人間の三大欲求である、性欲を刺激し、生存本能を呼び覚ます。それにより、俺らの生存率を高める効果が…」

「そのぐらいにしておけ、猫」

「隊長もめっちゃ見てたつすよね？」

「仕方がないだろ？ 男の悲しい性だ。といつかこうこう話題に一

番食いつきそうな狸の奴はどうした？あのエロと変態の権化は？」

「…帰る途中に、メイリンという名前の幼女を見かけてしまい…オーバルカメラを取りに戻つて行きました」

「何をやつてているんだあいつは…あいつらしくはあるのだが…」

はあ、とため息をつく。

「…しようがない。一人とも、報告を聞かせろ」

「了解つす」

「分かりました」

数分後…

「ふむ…ここ、星見の塔とそほど変わったものはなさそうだな…出現した魔獣の種類ぐらいか」

「そうですね…そして共通点は鐘…」

「十中八九アーティファクトで間違いないかと」

「どううな

「どうするッすか？誰にも見つからずに回収どころじなら… そりつすね…俺ら「致死軍」が五人ほどいれば何とかなるつすよ

そういう猫面に対し、狐面はいや…と首を振る。

「そこを判断するのは私たちではなく主だ…しかし、主の性格上そのようなことにはならんだろう」

「それもそうすね…主だったら…まあ、持ち帰つてまでの興味は示そうとしないと思つツす」

「でしようね…」

「そういうわけだ…下がつていいぞ」

「了解つす…あ、いや。そういうば狸の奴が面白いことを言つてたつすよ」

「…なんだ、可愛い幼子でも見つけたか？」

「いいえ、珍しくまともそうでしたよ。クロイス家の暗部みたいなのが、つしい面の女性は頭が痛くなつてきた。気持ちは分からぬでもな

「いいえ、珍しくまともそうでしたよ。クロイス家の暗部みたいなのが、つしい面の女性は頭が痛くなつてきた。気持ちは分からぬでもな

つすね」

「クロイス家…？ああ、IBCの社長だったか」

「ええ。生意氣にもシリアスな表情を浮かべつつ《人の欲とは恐ろしいものですね…》とか言つてつたつす」

「あいつがシリアスな表情だと…馬鹿なつ…？」

狐はそんなありえない報告に驚愕する。ありえない。何があり得ないつて太陽が東から上つてくるがごときの一大事だ。天地が裂ける。

「ドッペルゲンガーである可能性は？もしくは猫。お前何らかの幻術にかかるといいだろ？」「

「…隊長。信じられないのは分かりますが…事実です」

比較的常識人であるみつし一面の声によつやく納得する。

「…正直信じられぬが…後で確認しておこう」

「そうした方がよろしいかと。たぶん今頃、東通りで盗撮している頃合いかと思います」

「はあ……」

ため息をつきたくなる気持ちはよく分かる。

「…下がつていいぞ。リア様…じゃなかつたか。アスノリア様には私がから報告しておく」

「分かりました。お疲れ様です」

「お疲れさまっす」

みつし一面と猫面の一人は虚空へと消えた。それを見届けてから隊長と呼べし男は、はあ…と再びため息をつく。

「…帰るか」

そして、狐面の彼も…虚空に消えた。



## 第七話　IJの変態がああああああああああああ！（前書き）

前回の話の後半あたりを改編しました。

見ない」と何の急展開…ってな感じになるかもしねないの一度田を通してもいいやると。

それは突然やつてきた。

前回の星見の塔探索から数日後。とある旧市街のマンションの一室の木製テーブルに特務支援課が見事市長暗殺をストップさせたという内容の新聞記事が投げ捨てられている。

そんな部屋の主であるリアは下着姿でベッドに寝そべり、娯楽小

「アーティストの才能を引き出す、アーティスティックなアシスタント

そんな時だつた。

突如、部屋の玄関近くでバラが舞つた。

リアはそれに気づき一瞬にして身構える。それは結構見慣れた光景でもあり、その経験から次に何が起こるのかが読めているからだ。そして読み通り、たくさんのバラが舞う中に一人の男が突如出現する。

白い仮面に、白いマント。こんな服装では絶対に町を歩きたくない。そう思わせる服装の男。一人の執行者。そして彼は完全なくつろぎスタイルであるために下着姿であるリアに対して言つた。

「ふふ、久しへ

一瞬にしてちょうど読んでいた娯楽小説「闇医者グレン」一巻を投擲。顔面にヒット！侵入者：ブルブランはダウンした。

「んでもってブルブラン…何しに来たのよ…」

その白衣の男…怪盗紳士ブルブランを彼女は不機嫌そのものな様子で睨む。折角の一人の休憩時間を邪魔されたのだ。ムカつく。

「ふふ…そう睨まないでくれたまえ」

「女の子の部屋に勝手に侵入＆下着姿見ておいて反省の色なし？」

「残念ながら君の半裸に興味はないのでね」

「死ねよ。頼むから死んでくれよ。怪盗紳士ならぬ変態紳士と呼んでやうがうか？」

めっちゃ不機嫌な顔を浮かべつつ乱暴な口調でしゃべっているリアは、現在はちゃんと上が和服で、下はミニスカとニーソックスという普段通りの格好をしている。つたく…と悪態をつきながら椅子に座り、女の敵を睨む。

「まったく…せっかくの休みだつてのに…」

「そんな君に申し訳ないのだが、仕事だ」

「…帰れ。今すぐ。刹那的な速さでひとつと早く秒速で光の速度で帰れ」

なんで休日返上で働かなければならん。ただでさえ機嫌が悪いのに。

「まずは話だけでも聞いてはくれないか？君の前回の報告に関することなのだよ」

「まったく…前回の報告つていつと…クロイス家の？」

そんな状態でも話を聞くところを見るとそこ人がいいのかも  
しない。

そんな彼女の身喰らう蛇での役割は大抵が頭脳労働になっている。  
使徒の立てた計画の細かいところを詰めたり、外部との交渉をした  
り、軍備に関してとか… そちらの面倒なことを一身で引き受けている。

そこでその副産物として彼女が念のために放つておいた諜報員が  
かなり驚愕の情報をよこしてきたのだ。

その内容がまた… すごいよ？クロイス家の暗部みたいなものなの  
だが… 人の欲望つてのは怖いものだと思わせるものだった。

「ああ。それで間違いない」

「…はあ」

深々とため息を一つ。そして面倒ではあつたし、こいつの憎たら  
しい笑みもムカつくものの『どうせ暇だしいつか』と自分を納得さ  
せる。そして、頭を切り替え、いつたん先ほどの事は頭の隅に追い  
やる。

「まあ、いいわ。聞くだけ聞いてあげる。無理そうだつたら拒否する  
から」

「承知した。執行者はそもそも行動を制限されることはない自由な  
身分。そこは君の自由だ」

「はいはい…」

そう言つて両者は向かい合ひう形で木製のオンボロ椅子に座つた。

そして、数十分後…

「つまり、協力を申し出ようとこいつになつたって事?」

「要約するとそななるな。あの計画はわれら身驗らつ蛇にとつてとても役に立つ内容なのだよ。特に博士が興味を示していたな」

と言つことらしかつた。ちなみに博士とは身驗らつ蛇の技術部門である《十三工房》を統括している、使徒アンギスだ。

そして、リアはもはやすつかり冷めてしまつた安物のインスタントの紅茶を口に含み、数秒間だけ黙考する。

「行けそうか?」

「余裕でしょうね。勝利はすでにわれの手の上にあり」

そう言つて首をすくめ、立ち上がる。

「さて…私はさつとこの案件を終わらせてくるけど…ブルーブランはこれからどうするの?またヨシュエスへの嫌がらせ?」「嫌がらせとはどんでもない。ちよつとした戯れだ」

「あつや…」

あれが?何か貴重な芸術品を隠して、怪盗Bと言つ名で暗号を送る。そして、それを必死に探している様子を遠くから眺める。嫌がらせじやなかつたら何?

「それに今回のターゲットは特務支援課といつ警察の諸君だ、まだ稚拙だが大いなる輝きを秘めている宝石といったところか」

「ああ…あれね」

「知り合いなのか？」

「まね。カンパネルラに紹介されたんだけど。中々面白い人材がそろってるわよ」

それを最後にこの部屋の出口の扉へと手を掛ける。

「そんじゅ。ばいばい」

歩いて外へと出て行つた。

彼女…マリアベルはIBCビルの執務室にて、IBC関連の雑務に励んでいた。要するに父親であり、IBCの社長でもあるティーターの手伝いなのだが。

ただ、国際的な銀行と言つこともありその量は手伝いとはいえ馬鹿にならない。結構きつい量がある。

そんな時だつた。執務室に備え付けられている電話が音を響かせ、誰かが電話をかけてきたことを持ち主に伝える。

「だれかしら…？」

そう呟きながら、受話器を取る。そして、マリアベルが言葉を発

する前に、彼女を凍りつかせる一聲を不意打ちで放つてきた。

「初めまして、マリアベル・クロイスさん。零の至宝…だったっけ、順調に進んでる?」

思考が数秒間停止した。

なぜ知っている?いや、そもそも誰?なぜこんなことを電話で話していく?何が目的?

なぜ、なぜ、なぜ。その単語だけが脳を支配しかける。しかし、わずか数秒で混乱を収める。マリアベルは手伝いとはいえ、若くしてIBCの仕事を任せられているのだ。そのぐらいの不意打ちで我を忘れるような可愛げのある性格はしていない。

「…あなたが知りませんがあまり礼儀がなつていなの方のようですね」

「おう…何で?」

「まずは用件より自分が名乗るのが先でしょ?」

「…なるほど…いや…ごめん、ごめん。確かにそのとおりね」

あははーと思わず氣の抜けるようなのんきな笑い声を響かせながら、再び言葉を発する。

「改めまして、私は『身喰らひつ蛇』が執行者№014 表裏比興  
アスノリア 以後よろしく」

その単語に驚愕する。

しかし、それと同時に、脳の片隅ではなるほどと思つていてる自分がいた。かつて、リベルを大混乱に陥れた謎の結社である『身喰らひつ蛇』それほどの巨大な組織ならこちらがやつていてることをつか

むことぐらにはできるのかもしれない。そう思えるからだ。  
そして、マリアベルは努めて冷静な声をだしながら応じる。

「身喰らう蛇…ですか。何の用ですか？」

「ふふ…単刀直入に行かせてもらひと…あなたたちの計画に協力しようかと思つてね。どう?」

「…いきなりそのよひに言はれて、いい返事がもらえると思つて?」

「思つてゐるわよ?問答無用で拒否するのなら、遊撃士あたりにばらしね」

「……」

完全な脅迫だった。思わず沈黙してしまつマリアベルに対し、アスノリアと名乗った少女は続ける。

「別にそんな無理難題を出そうつて思つてゐるわけじゃないのよ?それどころかこちらからは特に要求はない  
「どういふことですか?」

「あなたたちの計画は身喰らう蛇にとつても興味深いのよ。だからこちらが申し出るのは貴方たちの計画が無事成功するよつとするための協力。正直なところ身喰らう蛇の技術はエプスタイン財団なんか田じやないぐらじに進んでるわよ」

美味しい話には裏がある。そんな諺が脳裏に浮かぶ。

マリアベルはそのことを完全に信用するほど人が良くはない。ただ、身喰らう蛇の技術力と言うのは魅力的だった。マリアベルの進める計画に大きな助けとなるのは明らかなのだ。だからこつ答えた。

「…もう少し、待つていただけませんこと?残念ながら私だけで進めている計画ではありますんで」

「ん、OK。どうせ受けるにしても後日きちんと話しあないといけないものね。日時はそっちが好きなように決めて。場所は…直接そっちに行つても？」

「…承知しましたわ。では、クロスベル生誕祭初日の午前十時に、IBCビルで」

「委細承知：ってね。それじゃあ、ばいばい。マリアベルさん」

それを最後に、電話は切れた。

マリアベルは薄く目をつむり、何かを考え込んでいるかのようつい数分間動くことはなかった。

やがて、再び受話器を手に取り、どこかに連絡を取り始めた。

## 第八話　IN遊撃士協会（前書き）

最近家族にパソコン占領される…

「というわけなのですが…お願いできます?」

「ええ、もちろんよ。ただ、緊急度の低い依頼だから後回しにされちゃうかもしないけれど…」

「あ、はい。構いません。そこまで急ぎでもありますんで」

遊撃士協会。それを簡潔に一言で言い表せばぶつちやけ何でも屋である。

そこのクロスベル支部に受付のミシドルと話しているリアの姿があつた。

ただ、普段の彼女を知る者からすればありえないぐらいに柔らかい笑みをうかべ、どこぞの令嬢と言われればあつさり納得してしまいうような雰囲気を身にまとっていたが。

「なんかごめんなさいね。他にも依頼が多いのよ。たぶん生誕祭が終わつた後になつてしまつけど…」

そう。今日は生誕祭初日だった。生誕祭つてのはそのまま祭りだ。クロスベル全体でクロスベル誕生…えーと…何年だつけ?まあいいや。何周年かを記念したから、数日かけてドンチヤン騒ぎを起こす。たぶん今日がクロスベルが誕生して何年とか意識している人間はないだろうけど。大半の人間にとつてはただ騒ぎたいだけに違いない。少なくともリアにとつてはそうである。

「そうみたいですね…他の国もいろいろ見てきましたけど、これだけの数の依頼が同時に張られてるのって初めて見ましたよ。お疲れ様です」

と、穏やかにいいながら木製掲示板の樹の部分が見えないぐらいに張り付けられまくっている依頼の数々を見る。すげえ…なんか壮观ですらある。

「そういえば…警察での特務支援課つてところでも似たようなことやつてるらしいですけど、役に立つてますか？」

「うーん…最初は頼りなかつたし、それは今でもなんだけど…まあ、将来に期待つてところかしら」

「あらあら…」

等というたわいもない雑談をしていた。さて、あまり長居してHステル＆ヨシュアに見つかるのもあまり…いや、面白そうではあるけど…まあ、どうち道忙しいらしにし合えないか。などと思いつつ。

「それでは忙しいようなので。私はこれで」

「ええ。困ったことがあつたらいつでもビリビリ」

と互いに社交辞令を交わして立ち去りうつしたところで…

「ミシユルさん！ ただ今戻りましたーーあれ、お密さん？」  
「ただ今戻りました」

Hステルとヨシュアが入つてきたところドリアは思つたといつ。

「これもフラグだらうか…と。

そして、Hステルはそのお密さんの姿を確認した途端…

「えええええええええつー？」

驚きの声を上げた。

「ちよ、ちよっとあんたーなんでこるのよー。」

「あー、Hスチルさん! ポシュアねえ。お元気やつで何よつ。お変わりありませんか?」

「どりしたのその口調? 変よ?」

「つぬひやこわね。たまには私だけおしあせかかな女子を演じてみたくなることがあるのー。」

瞬時に人当たりのよれやうな笑みを消して仏頂面になる。演技だつたらじやべ、瞬時に雰囲気が変わる。女って怖い。

「どりして顔がこじらへ?」

そんなエスチルに反応してポシュアは冷静だった。僅かに目をやめ、「明らかに警戒してこます」と呟いた雰囲気を醸し出す。

「実は… パシパトやんたがいたくなつて… あいつは… ひきつけ… テ

へ

「……」

「「」あんなやつ

一瞬土下座しようかと思つたぐりの絶対零度的な視線に撃沈。ぐすん…みんな冷たい…

「ひど… ちよっとした冗談じゃないか…」

「話す気はない。とみていいですか?」

「…女子が落ち込んでるのにその反応はないよじやないの?」

はあ… と流れ見よがし氣にため息をつべと、置こつけぼつをくら

つていたミシユルが会話に混ざつてくる。

「ミシユアにエステル？どうしたのよさつきから？」

ミシユアはその質問にどう答えたものかと数秒間考え込んだもののやがてぱつりと一言。

「…アスノリア・ルアルティ。と言えば分りますか？」

「つー？」

ミシユルの顔が驚愕の表情へと変わり、次の瞬間には敵意の視線をリアに向ける。

「執行者NO、14『表裏比興』…」

「まあ、そりなんだけさ…」

三人同時に敵意を向けられて居心地悪い…いやまあ、仕方がない氣もあるけど…理性ではわかつても感情では追いつけるものじゃない。

「…とりあえず。一皿落ちついて話さない？」

「というかヨシュア君なら私がクロスベルにいることぐらい知つてたんでしょう？隠密行動に感してはどの執行者よりも上つて聞いてるし。少なくとも私よりは格段に上のはず」

「確かに知つてはいた。ただ、部下にクロスベルの情勢を調べさせているだけで特に怪しい動きをしているわけでもなかつたから、取り合えず様子見をしていた」

「でも、ここ遊撃士協会来た…つまりは行動を起こしたように見える。つてところかしら？」

「…そうだ」

遊撃士協会一階にある談話室のような場所。そこにリアとヨシュアとエステルがいた。ミシェルは受付の仕事を蜂起するわけにもいかないのでここにはいない。口を開いたのはエステルだった。

「それで、結社はまたここで何をしようとしているの…」

「いやあ…たぶんだれも来てな…そういうえばブルーブランが来てたつけ…まあ、来てたとしても私みたいに個人の用事だと思う」

「つへ…？そ、それじゃあ、なんであんたはここにいるのよ…？」

肩透かしを食らつたような表情をエステルはうかべる。ついでにリアはブルーブランの名前を思い出した瞬間にしかめつ面になる。

「里帰り。遊撃士協会に来たのはただの依頼よ。墓参りに使う花を集めてきて欲しくて」

「…本当に？」

「『』生まれ故郷だし…昔は『』まで発展してなかつたんだけどね  
え」

「なんかおばさん臭いわよ?」

「殺すぞ『』」

エスティルに殺氣立つた視線を向けたとたん、ヨシュアに殺氣立つた視線を向けられたのでゆっくりと殺氣を收め、エスティルがまとめるように言った。

「でもまあ、そういうことなら別に敵対する必要は…」

「その話が全部本当ならね」

しかし、ヨシュアが遮つた。それを見てやつぱりいいコンビだなとリアは感心する。エスティルは人がよすぎる。それゆえに誰とでもすぐに仲良くなれる。しかし、だからこそなのか、人を疑うということをしない。それは時に命取りとなりかねない一長一短な性格だ。それを補つているのがヨシュアだ。

「ちょっと『』シュア…」

「そもそも、ただの花集めといつのなら自分でもできるはずだ。わざわざ遊撃士協会を頼る必要があるとは思えない。…『風の剣聖』といういくらあなたでも敵わないような敵がいるといつのに」

「私は遊撃士協会を敵に回すつもりはないわよ。アリオス・マクレインだつけ？一度彼の戦績見てみたけど正面から戦り合えばあまり勝てる気はしないわね」

あくまで正面からやつたら…だが。大抵の人間は倒そうと思えばいくらでも方法はあるものだ。

例を挙げるとすれば「そういう…」話は変わりますがあなたには娘さんがいましたよね？」「な、なぜそれを…？」みたいな感じな

のがあげられる。あまりやりたくないが。胸糞悪いし。

ヨシュアが話を続ける。

「さうでなくとも身験らう蛇は遊撃士協会で最優先でマークされてると言つても過言ではない。それは分かっているはずだ」

確かに。トリアは肯定する。善良な市民に仇なす犯罪組織と善良な市民の味方。水と油といった関係だ。さらにリベル一派では田立ち過ぎた。あれ以来結社の動きをつかもうとし始めた組織が多い。

「ヨシュア君の言つとおり簡単には信用できないわよね。ただ、私としては別に信用されなくとも問題はないわ。私も人を信用する気はないもの」

「なつ……」

「だけど、私としては今は執行者として行動したくない。信じるか信じないかは勝手だけどね」

とだけ言つて、沈黙している若き一人の遊撃士を見やりつつ、ついさっきマリアベルさんのところで活動してきた事を思い出した。まあいいや。したくないと思つてるのは本當だし。うわ、我ながら酷い屁理屈。

そして、そうさう。と話題を変えるように言つ。

「あのね。レンの居場所知らない?」

「…なんでそんなことを?」

「あのリベルでの事件の後、結社にも帰つてこないのよね。そこで漆黒の牙とよばれた隠密行動の達人たるヨシュア君なら知つてるかなあって」

「あなたの部下にでも調べさせたりい。そういうのは得意分野なはずだ」

「…あの子つて天才だから」

調べて見たものの解らなかつたのだ。わかつたことといえばクロスベルにいる…かも?という信憑性もくそつたれもない情報だけ。

「なんであんたがそんなこと知りたいのよ?」

「私にとつてもレンちゃんは大事な子なのよね。可愛いし。抱き心地最高」

「だつたらなんであんなことをさせるのを止めさせないのよー」

「あんなこと…?ああ、執行者としての活動か。それに思いあたつたリアが言つ。

「…私はあの子の拠り所の一つぐらいはなれる。一緒にいてあげることができる。でもあの子の闇を取り除く事はできない」

ポツリと。匕ことなく寂しそうに言つ。

「え…?」

「結社にかかわる人間は心に大なり小なり何かしらの闇を抱えてる。それは過去だつたり。自分の本質だつたりと千差万別なのだけど。その中でも、レンちゃんの闇はとりわけ深い。私みたいな『壊れる人間』にはその闇を取り除くことなどできないわよ」

自らを壊れた人間と称し自虐的に小さく笑う。と、そんな表情もすぐさま消え、気の抜けた笑顔に戻る。

「と、そんな話はどうでもいいのよ、それで、知らない?」

「…ローゼンベルク工房。そこにいる可能性が高いって」

「エスティル!?」

リアの質問にあつさりとエステルは答える。それがリアとしても以外だつたらしく珍しくきょとんとした顔になる。

「いいの？」

「あたしにはあんたが抱えてる闇とやらは良く分からぬし、どうして壊れた人間なんて言ってるのかもわからない。ただ、レンを思う気持ちちは本物だと思った。だからよ」

笑顔でそう答えるエステルを珍獸を見るような目で見る。

「…そつか。何というか…まぶしいわね。ヨシュア君が惚れるのもわかるかも」

「…僕はまだあなたを信用したわけじゃありませんから」「解つてるわよ。それじゃ、私はそろそろいくわね」

それだけ言って、ヨシュアとエステルに背を向ける。そして、下に降りる階段に足を掛けようとしたところで振り返った。

「二人ともありがと」

今度は演技でも何でもなく、本心から柔軟に微笑んだ。

## 第九話 続いてエノローゼンベルク工房（前書き）

今まで一番長い地の文を書いた気がする…書いた気がするっていうか書いたの結構前だけど。

## 第九話 続いてエノローゼンベルク工房

「エニの先に……灯台下暗しつてやつね」

ローゼンベルク工房。十三工房の一つにして、主に人形を制作している。ただ、一口に人形と言つても鑑賞用のまるで生きているかのように精密な人形に始まり、人形兵器やらパテル＝マテルというガンドム並みの大きさを誇るもはや人形の領分を超えた気がしなくもない、人形と言つていいのかわからない人形という180°。方向性の違う人形まで千差万別だ。

…というかあれを人形と呼んでいいのだろうか。一つのそこらにある町ぐらいなら軽く壊滅させるぐらいの火力を持つあれを人形扱いしていいんだろうか？

それはさておきこれでも色々あつてこここの主人とは知り合いだ。マスターというわけでさつそく門の前に立ち、虚空に向かつて声を出す。するどびこからともなくおなじみの老人の声が機械越しに響く。

「ヨルグのおじさん。いるー？」

「…なんのようだ」

「遊びに来た」

「さつさと帰れ。貴様の戯言に構つてる暇はない」

「ひどい！？」

「つち…」

一つ舌打ちし、その直後に門が開く。その数秒後に一体のかわいらしい、リアにとつておなじみの子供ぐらいの大きさの人形が奥の扉からトコトコと歩いてきた。

「おお～久しぶり。元気だつた？あの意地悪なおじさんにいじめ

られてない？」

もちろん人形なので返事を返すことなく、華麗にスルーしてからペコリと一礼する。そして再び屋敷の中へと戻つていった。べつにあいさつしに来ただけとかいうわけではなく、ついてこいという意味だ。

「元気にしてるかな」

楽しげにそつぶやいてから小さな人形の背を追つていった。ちなみにこの屋敷の地下にあるとんでもなく長い迷路を踏破していくたびに、少しずつテンションが下がつてきたことは言つまでもない。

「おーっす。じいさん。ギックリ腰とか大丈夫?... というかなんのあの長い迷路?馬鹿なの?死ぬの?」  
「...それで何の用だ、じゃじゃ馬娘」

「だから遊びに来ただけ。つていうか本当にレンが来てるのね」

軽い罵倒を織り交ぜたあいさつをしながら中に入る。一番最初に田についたのが白髪の老人…ヨルグだった。老人なのだがぴんぴんしております。背筋がピンとしております。

ついで田についたのがゴルディアス級の人形。パテル＝マテルだつた。レンの所有している巨大人形だ。そちらにもおーっすと声をかけてみると、返事をするかのように田にあたる部分を数回点滅させる。

「うふうふ。…なんて言つてるんだろ?」

残念ながらレンじやないのでパテマテの言葉はわかりません。ちくしょう…

「馬鹿かお前は」

「黙れ、よぼよぼのジジイ。略してヨボジイ。そんでレンは?」「朝早くにクロスベルに出かけたぞ。残念だったな。バカ娘」「あらら。…ま、いいわ。枯れた老人で我慢しましよう」「ふん。気に入らんのならさつさと出でけ」「ふつふつふ…残念ながらレンが返つてくるまで帰る気はなし…お、導力ネット発見」

いつもの互いに悪口のようなあいさつを交わしているとこくつかのディスプレイを持った一つの端末を発見する。

「これどうしたの?根っからのアナログ派っぽいあなたが?」

「第六柱の奴が勝手においてつたんじや」

「博士から…?よく壊さなかつたわね。あなただつたら速攻で破壊しそうなものだけど。つこに仲直りしたの?」

「壊そ'うとはした。だが、最近はレンがいろいろやつとるみたいじやな……それに奴と仲が良かつたことなど一度としてない」  
「ふーん……」

その電源を勝手に入れ、キーボードをカタカタと操作し始める。

「……へえ……これが噂の導力ネットか……星振コードに比べればやっぱり性能は落ちるみたいだけど」

適当にネット上をぶらついてみる。これをレンがやつたらす「」ことになりそう……HBCビルの端末にハッキングするとかいとも簡単にこなしそうで怖い。ちなみにほかの一般的な端末ならまだしもHBC等の会社へのハッキングなどリアには無理だ。

「……それで、何しに来たのだ？」  
「だから遊びにきたんだって。ボケた？」  
「レンと会つて。何をするつもりだ？」  
「いつになく真面目な声だつた。へえ……と思ひながらもからかうよな声音で告げる。

「大事なんだ。レンの事」  
「……それで。結社に連れ戻しにでも来たか？」  
「それは本人の決めることでしょ？まあ、結社にあまり関わつてはは欲しくないわよそりや。でも、戻つてくれないのも寂しいのよね……」  
「めんどくさいやつだ」  
「この年で微妙にツンデレの奴に言われたくないわね」

ガツ！

胸ぐらをつかみあう音。

「切れるわよ？そろそろ」

「ふん。これだから最近の若いのは…堪忍が足りん」

「あらあら…ずいぶん年寄り臭いセリフで…」

「貴様の目は節穴か？これのどにが年寄りに見える。貴様こそその髪はなんだ？白髪だらけではないか」

「見る目がないわねクソジジイ。いいでしょ？これでも卑怯な手を使わせたら右に出るものはいないと皮肉交じりに称された『表裏比興』の実力を見るがいいわ！」

「ならば、こちらは最新型の人形兵器で…」

と、一触即発という雰囲気のところでの部屋の扉が開く。

「ただいま。おじいさん…と…え…」

「レン…」

入ってきた人間を見たとたん、ヨルグの事はもう眼中にないといつた感じで入ってきた少女…レンに抱きつぶ。

「久しぶりーレン。元気だった？風邪ひいてない？あ、身長少し伸びた？」

「ちょっとリア…苦しいわよ…」

「おつと…」ごめん、ごめん」

あはは…と笑いながらレンから距離を取る。

白いゴスロリと呼ばれる服に紫の髪をセミロングにしている、可愛らしい顔立ち。まだ子供ではあるのでスタイルは残念だがあと十年ぐらいすればさぞかしモテるだろ？と思わせる。というか一部の

人間からは今だからこそ付き合いたいと思う人間も多々いるだろ？  
… そりだろ？ 画面の前の諸君。

「それで、何しに来たの？」

「レンならわかるんじゃないの？」

「遊びに来ただけでしょ」

「その通り。いやーそこのヨボジイと違つて賢いわね～レンは

「黙れ。白髪」

ガツ！

胸ぐらをつかみあう音。

「相変わらず仲がいいのね

「ふふん。そうでしょ」

「ふん……」

リアは特に否定することもなく笑顔でスルーする。それを見て何が面白いのかレンはクスクスと笑つ。

「でも、驚いたわ。ここにリアが来るなんて。ビックリがわかつたの？」

「へえ…レンでもわからなうことがあるんだ」

「私の知らないこと以外は全部知つてるわ」

「ふふ…違ひないわね。実はヨシュア君が教えてくれたのよ」

「……」

それを聞いた途端にレンはつづき、口を開ざす。

「探してたわよ。レンの事」

「…………」

「会いに行けばいいのに」「知らないわよ。そんなの」

「あつそ」

ぱつりと呟くレンを見ながら、前回出合ったエステルの事を思い出す。彼女ならレンの事をなんとかできるんじやないか。そんな確信にも似た思いがあつた。

不思議なものだなと思う。エステルとはリベルールで関わったとはいえ敵として、しかも少しだけだ。まともにしゃべったのは前回のが初めてといえる。なのに、リアは何とかできるんじやないかと思えてきていた。思わせる魅力が彼女にあつた。

なんか嫉妬しちゃいそう…と思いながらも、ガサゴソと肩に下げていたポシェットから彼女は一枚の樹の板…将棋盤と駒を取りだす。

「とつあえず、レン！今度こそリベンジを果たす！」

今回こそ全敗記録をストップさせてやる！

「……ふふ」

「なん……だと……」

互いに木製の円形のテーブルにつき、一人で将棋をやりまくった。それはもうやりまくった。全敗した。今一人の眼前には将棋盤が置かれおり、リアの陣地はレンの駒で埋め尽くされている。

「必死に穴熊とかいう戦法を覚えてきたとこに……だああ！勝てない！イカサマじゃないわよねー？」

「将棋でイカサマってできるのかしら？」

「思わないけど……ええいもう一回だもう一回一次レンは飛車角抜き！」

数分後……

「……なんで……勝てない……」

「リアも懲りないわね……ちょっと尊敬するわ」

「ちくしょう……それじゃあ、今度はレンは王と歩だけ！……それ以外全部抜け！」

「……いや、それはさすがに……」

数分後……

「……」

「私にもわからない事つてあるのね……まさか勝てるとはおもなかつたわ……というかなんで勝てたのかしら？」

「だああああー！もうやめやめー！」

うがああああと田の前の番の駒をめぢやくぢやにかき回し、ソファにどすつと体をうずめる。

「123敗0勝…」

「うわあああああああああああん」

ぱつりとレンが呟いた自らの今までの戦績にソファの上でのたうちまわるリア。ヨルグはといえばそれを忌まわしげに見て舌打ちする。

「つるさいわ。静かにしろ！」

「ええい！そんな冷たい性格だからアンタはこの年でも独り身なんだよ！」

そう怒鳴り、ハア…とため息を付き時計を確認すると、よつこりせとソファから立ち上がる。

「…今日はそろそろ帰る。そんじゃね。レン。あとジジイ」「うふふ…また来て頂戴。なかなか楽しかったわ」「そうするわ。…あ、よかつたら今度はうすに来る？場所は…」「旧市街のロータスハイツって言つマンションドしょ？」「…言つまでもなかつたわね。そんじゃまた今度。気が向いたら来なよ」

ひらひらと手を振りながら、この家の住人達に背を向けると部屋の外からおなじみの人形が入室して来る。

「案内よろしく」

そう笑顔で呟つ。すると人形はやはりそれを華麗にスルーしてぺこりとお辞儀した。

「ふん。やつと帰ったか」

「その割にどこか楽しそうに見えたけど」

「気のせいだ」

とだけ言つてヨルグは再び机に座り、何らかの設計図を描いていた。それを見てレンはくすくすと笑う。

ヨルグはいわゆる人嫌いだ。過去に何があつたかは知らないが人を寄せ付けることはない。この人里離れた場所に住んでいることがらも明白だ。だから気に入らない相手というか、大抵の人間は屋敷に入ることすらかなわない。

そしてレンはそんな気難しい老人と普通に会う変わった執行者の事を思ひうかべる。

彼女：リアが執行者になつたのはヨシュアが結社から抜け、レンが執行者になる前：四年ほど前の事だ。

リアはレンの事をたいそう気に入つてるらしく、よく気にかけており、レンもリアにはレーヴェと言つもはやこの世にはいない執行者と同様に懷いていた。

彼女の二つ名は『表裏比興』

意味は『表裏のある油断のならない人物』だ。最近では単なる卑怯者という意味でも使われるが、おそらくリアにつけられている意味としては前者だろう。

実際、彼女になめてかかるとひどい目に会つ。結社に関わるうとする人間はほぼ確実と言つていいほどに彼女を通してふるいにかけられるのだが、それがいい年した男だった場合は死ぬよりひどい目に会つ。…女性の場合はやんわりと追い返しているみたいだが。

しかも、普段からアホっぽいことを言つて、「こいつ大したことないな」と思わせるように仕向けているのだから余計にたちが悪い。

彼女の普段の姿は仮面だ。敵を油断させ、敵を仕留めるための分厚すぎる仮面。

そして、それは口で言つほど簡単ではない。

例えばだ。普段内気な人間がいたとする。そんな人間が明るい人間という仮面をかぶり、それをずっと被り続けることは可能だろうか？喋りたくもないのに喋り。笑いたくもないのに笑うということができるのだろうか。

いや、大抵の人間にはできるのだろう。しかし、それをどの人間にも見せず永久に、誰にも愚痴ることはなく、独りきりであろうとも本来の自分を見せない。そんなことができる人間が果たしているのだろうか？

だが、リアはそれを実行している。昔の彼女を知るとある使徒アンギスがそう話しているのをレンは聞いたことがあった。

どんな人生を歩めばそんなことができるのだろうか。

「……」

「レン？どうした」

「ふふ、なんでもないわ…あ、いや…」

珍しく歯切れの悪いレンの返事にヨルグは設計図を描いている手

を止める。

「おじいさんは、リアが昔何をやつてたのか知つていいの？」

「さあ、聞いたこともないし、聞きたいとも思わん。だが執行者と立場である以上何かはあるのだろうがな」

レンも同感ではあつた。自分自身もさうだから。

「…ソバカス君とでも遊ぼうかしら」

モヤモヤしてきた頭を切り替えるかのように、レンは導力ネットにつないでいる端末の電源を入れた。

## 第十話 旧市街の不良チーム達

「おお……おいしいわねこれ」

「おお、嬢ちゃんにはわかるか」これがーいやはや最近の女性密は汁が跳ねるとかなんとか言いやがる奴が多くてよ……」

リアは湾岸区にあるラーメン屋で麺をすすっていた。湾岸区とはミシコラムと言つテー・マ・パーク行きの水上バスもある場所だ。

普段はそれなりに人も多いのだが、今は昼時をちょい過ぎたあたりの時間でちょうど客も少なくすんなりと座れた。

そのまま屋台のおっちゃんと雑談しながら最後につゆを豪快に飲み干す。

「ふう……じちそう様ーおいしかったわ」

「ガハハーー」じちもそんだけおいしそうに食つてくれると作り甲斐があるつてな。また来てくれよー！」

「ん、また来るわね」

ひらひらと手を振りながら、その場を後にして…

旧市街の誇る二つの不良集団…サーベルパイパーとテスタメンツが遠田に喧嘩してこるのが見えた。

「ん?なんだありやあ?」

同様に不良の集団に気づいた屋台のおっちゃんが疑問符を上げる。まあ、この不良たちは旧市街を主な戦場としているので別の地区に住んでいる人間にはなじみがないのだろう。

そして我らが主人公。リアはと、

「おお！喧嘩じゃないか！」

野次馬根性を働かせ飛び出していく。

「おーそこだそこーやれやれー！」

リアは最前列で思いつき喧嘩を煽っていた。いや、喧嘩というより、二つの不良集団による勝ち抜きタイム戦。その効果か最初は戸惑い気味に見ていた野次馬も祭りの余興のような感じで完全に見世物として見ていた。

少し視線をめぐらせばどちらが勝つかを賭けている人間も多数。

「おらつ、青坊主！ 気合入れてかかってこいやあ！  
「言われるまでもないさ。行くぞ！」

さほど戦闘のレベルは高いわけでもないが素人目からすれば十分見て楽しめるレベルではあった。というか不良にしてはレベル高くな?とリアの目から見て思う。

「リアー!これは何事だ?」

そんな時に後ろから自分の事をよぶ声がする。声のした方を向くとそこには特務支援課のメンバーが。

「おつと、これは支援課メンバーも諸君。ちょりーっす」

「ちょ、ちょり?」

「解らないならスルーしていいわよ」

ヒリイの疑問を解消せずに話を続ける。

「これを見止めに来た…ってところ?」

「ああ、さつきワジとヴァルトが喧嘩かしてるって通報が…」

と、一回言葉を切り周りを見渡す。

「何かもう完全に見世物だな」

「でしょ。旧市街きつての不良集団による勝ち抜きタイムン戦。なかなかいい勝負になつてるわね。止めるの?」

「ああ、いくらなんでも場所が悪いしな…」

「ええー…ふーーふーーふーー」

「あのな…」

ロイドの判断に、思わずブーイングする。不満たらたらであつたものの、善良な一般市民(笑)としては警察に逆らう気に漏れなかつたので諦めて帰るか。と、思ったところでその場に大きな変化が

起きる。

「ちゅうとちゅうと、あなたたち何をしているのよ？」

そこにいたのはつい昨日会つたばかりの若い遊撃士。ヨシコア&エスティル。なんかもう長いしヨシコアで行こう。うん。というわけでヨシコアスが喧嘩している集団に割つて入る。

「全く、連絡を受けて見に来てみればゾロゾロと……あなたたち旧市街のサーベルバイパーとテスタメンツね？ 喧嘩は終わり。とっとと解散しなさいよね！」

「なんだあ。てめえらは？」

サーベルバイパーのリーダー格らしき人物が不機嫌そうな声を上げる。名をヴァルドとか言つていたはずだ。

そのヴァルドはせつかく盛り上がりってきた喧嘩に水を差されたのが気に食わないらしく、若干苛立つた声を上げる。

「遊撃士協会に所属する者です。あなた方が喧嘩をしていると連絡を受けて、仲裁にやつてきました」

「遊撃士だと？」

「ヨシコア・ブライトにエスティル・ブライトか。雑誌で何度も見かけたね」

「というかあのリベルでの事件が解決してから一ヶ月近くはほとんどの雑誌に映つてた気がする。「リベルを救つた若き英雄」とかそんな感じの見出しど」

そんなことを思い出している間も話は進み、ワジ、ヴァルド、ヨシコアス達が自己紹介を済ましてからワジがヨシコアスに状況の説明を話し始めた。

サーベルパイパーとテスタメンツで勝ち抜きタイマン戦をしてい  
ることや、その詳しいルール。ふんふん、とエステルは相槌を打  
ち…

「それなら構わないか……つて違う違う！試合をするのはともかく、  
こんな場所でしちゃダメでしょ！ここは人通りも多いし、別の場所  
でやればいいじゃない！」

「ハッ、そんなのは俺らの勝手！しかしてめえ、遊撃士だがなんだ  
か知らないが随分と偉そうなクチ叩きやがるな。調子に乗ってるん  
じゃねえか。アア？」

チンピラの鏡のようなことを言つてゐるのがヴァルドだ。リアは  
改めてその男を観察し始める。

上が赤いジャンパー一枚という超薄型装備。

しかも前を開けているので前は素肌がもろに見える。

ふむ…とそれらを見てからひと声。

…え、あれ…ゲイの人ですか…？

と思つたのはリアの心が汚れているからだろうか？まあ、そんな  
ことはどうでもいい。その間にも話は続く。

「あのね、調子に乗つてるのはあなたたちの方でしょ。あたしは常識的なことを言つてているだけじゃない」

「Iのアマ……どうやら少しばかり、痛い目に遭いたいらしいな？」

その黒髪の野郎と一緒に可愛がつてもいいんだぜ？」

なん……だと……

「この人田のあるところで可愛がる……だと……なんて特殊な趣味を……しかもヨシュアも一緒に可愛がるとか禁断の三P…え、ちょ、待てよ？ 同性であるヨシュアを可愛がる……やっぱりゲイの人！？ まさかのバイセクシャル！？ どうしようつなんかものす」くムラムラしてきましたんですけど！？」

「誰だ今の奴！？ 出でここやー！」

なんか知らんけど呼ばれたのだとつあえず前に出る。

「私だけど……何か？」

「何かじやねえだろ！？ なんだよゲイの人つて！？」

「え、いやだつて……そのガタイでその服装は……男誘つてるようになつか……」

「遊撃士の奴らよりてめえを先に始末した方がよさそうだな……」  
「キヤー！ ゲイの人にーおーかーせーれーるー助けておまわりさん（棒）」

支援課メンバーの後ろへとダッシュ！

「さあ！ 行くのだー選ばれし勇者たちよ！？」

「煽るだけ煽つておいて逃げるのはどうかと……」

ティオの発言に色々と文句は言いたかつたが可愛いので素直にこ

めんなさい。と謝つておく。

そしてロイドたちに視線が向き（正確には後ろに逃げ込んだリアにならぬ）ロイドを筆頭とするパーティーも騒動の中心へと近寄る。

「どうも」

「あれ？」

「ロイド君たち？」

「話は聞かせてもらつたよ。まずはヴァルド。落ち着いてくれ」

「…ハツ、ここまでのアマに言われておちつけだ？ふざけてんのか」

ヴァルドはゲイ扱いに怒り心頭らしく、怒氣を全身にこじませている。今にも鎖を巻いた木刀片手に暴れかねん。

「まあ、確かに。それに落ち着いて話すにしても君たちも僕らに解散しろとこいつのだらう？ここまで来て、はい解散つてのもねえ。お互い勝負するくらいしかスジは通せないんじやないかな？さつきからリアが観客煽つてたから、周囲も不完全燃焼気味だし」

周りの一般ピーポーを見渡す。確かに大半の人間が「ええ…終わっちやうの？」みたいな顔だった。

「なんかリアのせいで場がこじれてる気がすんのは気のせいか？」

ランディの視線がリアを向き、リアはブイツと視線をそらす。

「だつて、久々に面白そつた最高の暇つぶしが…これは引っ搔き回さないと」

「おい」

しかも確信犯でありやがつた。遊撃士と支援課メンバーによる冷たい視線が殺到する。それを受けさすがにやりすぎたと海よりもマリアナ海溝よりも深く反省し、リアは幼少のころから培つた話術でこの場を收めようとする。

「ええと……めんなさい。えーと……ほらゲイの人も……」

「アア？」

「ボルドさんも……」

「ヴァルドだ！」

「発音似てるんだいいじゃないか。あ、それと、さつき私はこの場を收めるといったな？」

「ヴァルドさんも……ほら、遊撃士の人怒りせると怖いよ？貴方の実力じゃあコテンパンだよ？」

「……こんな小娘が俺より上だと？ハツ、だつたら証明してみるやあつ！！」

あれは嘘だ。ここまで言つたらとこりん煽つてやる。田指せ乱闘騒ぎ。

ヴァルドは自らの激情のままに木刀をエステルへと叩きつける。

が……

「あ…………？」

あ、ありのまま今起こつたことを話すぜ！

ヴァルドがエステルに襲い掛かつたと思つたら、ヴァルドは地面に座り込んでいた。

な、何を言つてゐのかわからぬえと思つが……俺にもわからなかつ

た…

頭がどうに（以下略）

と、大げさに書いてはいるが、ただ単に襲ってきたヴァルドをエステルが背負い投げしただけである。「だけ」って言えるほど簡単じゃないんだけど。しかも怪我させないようふんわりと着地させてた。

「ヴァ、ヴァルドさんが……」

パイパートつ端が「ウソだろ……」とも言ひたげなニュアンスで呆然とつぶやく。

「えっと、大丈夫？」

ヴァルドはそれには答えずに無言で立ち上がる。

小娘にいきなり投げ飛ばされ、怪我しないように配慮されたうえで、心配される…それは彼のプライド傷付けるのには十分だった。

「ククク、ハハハハハハハッ……。悪かったな。悔つたりして。だがよお、さすがにナメすぎじゃあねえのかつ！」

言下に鎖を巻いた木刀をエステルに叩きつける。さつきとは勢いもキレもまったく違い、本当に悔つていて手加減していたということを納得させられる一撃だつた。さすがにエステルの顔も強張る。

「あ、危なっ…」

「やれやれ…君たちも調子に乗りすぎだよ」

「ああもう一双方落ち着いてくれ！」

そういうものの、リアがさつきから煽っていたせいもあり、口

イドに耳を傾ける者は誰もいない。それに周りの野次馬たちの熱も増し始める。

「狐。お前はどうち勝つと思つて？」

「それ……せ、上順当に考えて遊撃士じゃないですか?」

メノアーツガ

「え、ちょ…隊長！？聞いてないっすよ！？明後日が給料日だから

今金に余裕が…」

そんな会話まで聞こえてくる。そんな中、ヴァルドがさらにその場の混乱を強くする一言を言つた。

「…まあ、ふたりのめししてやあ…」

最後のあ…はワジの物だった。その瞬間にブチッと何かが切れる音がした。

「追い待てやゲイ！」

ヴァルド、主人公の逆鱗に触れる。

心法

「……………ああ！女のくせして中々いい気遣いやねえか！」

正面からそれなりに本気の怒気をにじませてもヴァルドは動じる  
どうか楽しげに言い返す。それを聞きながらリアは一応としてお

いた腰の柄から刀身まですべてが真っ黒な長剣をすりつと音もなく抜き放つ。

「殺す…………」

「あたしもちよつと腹が立つてきた。そつちがその気なら決着を付けてもいいんですけど?」

「はつーまとめてふつ飛ばしてやりますー」

「ああ、もう。ロシュアからも何か言ってくれ…………」

ロイドはロシュアに救援コール。

「ごめん、ボクもちよつと退けられないかな……」

「うつ…………」

救援コール拒否。

「フフ、それじゃあ僕はヴァルド側に加勢しようがな

「この際全員ぶち殺してやる……皆殺しだ……」

「だああー!だから何でそうなるんだって」

リアの物騒な発言に頭を咎ませながら、ロイドは頭を搔きむしる。そんな時。

「あのよお、そんなにせり合いたいんだつたら別 の方法でやればいいんじやね?」

「ん?」

助け舟は支援課のむつ一人の男が出してくれた。

「せつかくの祭りだ。遺恨を残してもつまらねえだろ。だつたらス

カツとする方法で決着を付ける一つのはじまりよ。」

「つまり？」

ランディの発言にリアは質問すると……

「ああ、そいつはな……」

その結果は……

## 第十一話 田中街にて（前書き）

最近しまじりの妹である、はなりちゃんに萌える。本遍と全く関係ないけど

「何でもアリのマクソンね……が、これはこれでありますか

ランティの提案を大雑把に簡潔に適当にまとめるところの今の一言に集約される。詳しく言うと旧市街のところどころに設置された三つのチェックポイントがあり、そこを経由して、旧市街のほぼ全域を三周する。罠や妨害何でもアリ。ちなみに一人ペア。ん…一人ペア…?

「ねえ、私にペアがないんだけど」

「君なら一人でもなんとかなるんじゃない?」

「ひどい!?

あれ、おかしいな…田から汗が…。ちなみにリアはここに移動するまでにだいぶ怒りは落ち着いてくる。熱しやすく冷めやすい性格らしい

「ティオえもーん!ワジ君がいじめてくれるよー!なんかあいつを『テンパンにでかける道具を出して~』

「…………」

「無視は勘弁していただけないでしょ? が。慰めてくれるなら最高だけどせめて突つ込みを…おねがえしますだあ、お代官様あ…」

「…………」

やべ、本気で泣きそつ…つ…

「ちくしょうつー…もつこー…一人でやつてや…」

といったところで野次馬の中に見知った人物を発見した。

「やううと思つたけど……」

すぐさまその人物に接近。… その人物とは年は二十の中頃でＴシャツにジーンズというラフな格好で、男にしては少し長いかな？つてぐらりに黒っぽい青い色をした髪の毛を伸ばしていた。

「やあ、狸君」

「おや？ これはこれは主じやないですか。どうしました？」

「ちょっと付き合え」

「私がですか？ 私は今からじょっとした写真撮影をしないといけないのですが……」

「」の野郎… 主君の命令に逆らうとは何事だ。じょうがない… 気は進まないけど…

「あとで好きなだけ踏んであげるから」

「ニーソックスにミニスカ。後ヒール」

「…まあ、いいわ」

「交渉成立ですね」

そんな取引を小声で済まし、このドＭの変態を引き連れ、皆の輪に戻る。ちなみにリア本人にはドＳでもなんでもないのであしからず。

「今、ものす」ぐ変態チックな会話が聞こえてきたのですが…」

ティオの誰にも聞かせるつもりはないのであらう小さな独り言にピクリと反応するリア。え？ 何で聞こえたの？…まあ、追及は後でい

いや。

改めてこのマーチソンの参加者選手たちに向き直る。

「というわけで。助つ人の狸」

「狸？」

「皆様、初めまして。名前の方は色々ありますね。追求しないでいただけるとありがたい。それで、私が参加することに、問題はないでしようか？」

「あ、ああ…俺は構わないと思う。みんなは？」

「別にいいと思うわよ。確かにリアだけ一人つていうのも不公平だし」

「ありがとうございます」

そんな風に突然の参加者に戸惑う周りをしり目に、ただ、ヨシュアとワジとランディの三人だけは敏感にことあることを察知した。

それは人を殺した者にのみ付いて回る、血の匂い。それがこの青年からにじみでている事。

そんな一部の人間に、どこか不自然な空気が流れているのを狸は敏感に察知する。

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもないよ。それよりも早くはじめちゃわない？」

「あ、ああ…そうそうだな」

代表してワジが答え、それを受けたランディが言つ。

「んじゃ、じゃんけんで決めるか。勝ち抜けた奴から順番につてことで」

「ん、OK」

そして決まった順番が

一番 不良ヘッド一人組

二番 見た目は好青年、頭脳は変態＆リア

三番 ヨシコエス

四番 支援課メンバー

となつた。そしてランティが作戦タイムと並んで一旦ほかのグループと離れる。

「どうする？… とか何で変態と組まなくちゃならないんだか… 女の子ならまだしも…」

「主が誘つたのではありませんか… そして作戦の方ですが… 今装備のほとんどを家に置いて来ていまして… 最低限の装備しかありません」

「使えない奴…」

「いやいや。街中で写真撮影（とこう名の盗撮）をするのになんで武器を持ち歩かなければならないのですか」

「んじや、その最低限の装備っていうのは何があるの？」

「忍者刀一本に爆弾系统が一通りですね」

忍者刀っていうのは致死軍のデフォルト装備だ。普通の刀よりは短いが脇差よりは長い。他にもいろいろと多機能だったりするのだが… まあそこはW.E.K.I.先生を頼つてほしい。説明めんどい。

あと爆弾系统つてのは多種多様な爆弾にスタングレネードなどの狸にとってのデフォルト装備。

「… それじゃあ変態はさつさと走り抜けてチックポイントを叩く係。私は相手からの妨害阻止とかいろいろ。でどう？」

「はい。依存はありません。とか今あなたは変態と呼びましたよね？」

「それが？」

「もつと罵つてください……！」

鼻息荒くしてそう叫ぶのをスルーして、速攻で作戦会議は終了。何でこんなやつらしかいんだらう…

そこでふと狸の愛用のオーバルカメラが鞄からのぞいてるのが見える。もつき写真撮影とか言つてた気が。

「誰を盗撮するのよ？」

「東通りのモルス会長の孫。メイリンちゃんですかね。まさしく、純真無垢といった性格で、兄の事をお兄さんと呼び慕つているところには最高に萌えを感じます」

「あとで焼き増し分ちうだい」

「…あなたも人のことを言えないのではないかと」

「小さい女の子を可愛いと思うのは誰でもそうでしょう」

これ警察に聞かれたら捕まつてるんじゃないだらうか？すぐそこに超真面目な警察がいるのに。それはともあれ作戦タイムは終了。再びスタートラインに集まる。そこで彼女は気づいた。気づいてしまつた。それを隣りの変態に問つ。

「ねえ…もつきからティオちゃん曰が恐ろしく冷たいものになつてるんだけど」

「ティオ…？ああ、猫耳幼女の事ですか」

「ねえ…なんか今あなたの発言の次の瞬間に今のティオちゃんの視線で人ひとりを殺せそうなものになつたんだけど…」

「ふむ…聞こえてるのかもしれませんね」

今リアたちはかなり小声でしゃべつてゐる。しかもティオとはかなりの距離がある。…常人より耳がいいというだけで説明できるも

のでもない気がする。

そんなことを考えたものの、次の瞬間には「まあいいや」と呟き頭を切り替える。

問題なのはさつきまでの会話が聞こえてたとしてどう翻訳するかだ。今の自分が客観的にあの会話を思い出してもかなり変態チックだった氣がする。自分だったら愛想笑いしながらちょっとずつ距離を取るレベルだ。どうしよ？ あっちのゲイ野郎とかならまだ氣にしないで済むんだけど… テイオちゃんはなあ… 辛い。

何気にここ一ヶ月ほどまともに働かせていないアヒルを回転させている間に、他の参加者たちの準備も整つたらしく、審判的存在であるエリイが口を開く。

「それじゃあ号令は私が務めさせてもらうわね。最初の空砲で第1チームがスタート。それから5秒毎に空砲を撃つからそれで第一、第二」とスタート。

「タイムのカウントは私が担当します」

タイマーを持つて準備しているティオに手を振つて見た。… ガン無視された。マジでどうしよう… つべこなことならちよつと不利にはなるが変態と組まなければよかつた… くそう、数分前の自分をぶん殴つてやりたい… と結構マジで落ち込んでいた。

「あー… なんかテンション下がる。さつやとはじめよう。やして終わらせよう

「いいえ、真打ちがまだよ！」

見知らぬ女性の声が響いた。

「グ、グレイスさん？」

「確かクロスベル・タイムズの記者… だつたけ？」

クロスベル・タイムズといつのはクロスベルでの事をまとめた新聞の事だ。そのまんまだね。

「やつほ～。ボーアイズ＆ガールズ、何だか面白そつなことやつりつとしているみたいじゃない？…ってあれ？ 狸さん？ 何でここに？」

「はは。どうも、先日は助かりました」

「いやいやー。それはこちらもですよ。おかげ様で特ダネつかめましたし」

それを聞いたリアは誰にも気づかれないようにこっそりと、唇の動きを最小限にまで抑え、ギリギリ狸にだけ聞こえるように声を調整。はたから見ればただ突っ立っているようにしか見えないようにして問いかける。

「特ダネって？」

「市長さんの秘書の…えーとアーガストさん？ の黒い「わざを色々」と」

狸も同じようにして答えた。

「…アーネストさんの事？」

「男の名前なんてどうでもいいですよ」

実際にこの変態らしい。

「？ 狸さんどうしました？」

「おつと、失礼。少し考え方を」

「そうですか。あ、そうそう。」の前また面白そうな話が聞けたんですけど、後でどうですか？」

「お、良いですね。」のレースが終わったらお伺いします。面白うな話を持つてね」

「ええ。楽しみにします」

「それで、グレイスさん、何をじこ?」

ロイドがいい加減話を戻そとしたのか軌道修正。

「おおつとそうちだつた! その話お姉さんも一枚歯ませなさいよね!」

「歯ませなさい!」

「何をするつもりだ?」

その、ヴァルドの疑問にグレイスはどこからともなくマイクを取り出しつゝ、はつきりと聞き取り取りやすい声で告げた。

「レースと言えば実況よー。カメラマンも連れてきたから思いつきり盛り上げてあげるわー!」

そうこうでレースが一望できる建物へと駆け上がりつて行った。

「…んじゅあ、始めるとするかー!」

ポカソとしている一同だったが、ランディの声こぼりとなる

「それじゃあ皆。スタートライン

Hリイに空砲を撃つ用意ができる。

「それでは、カウント始めます……3、2、1、0

パン!」

同時に空砲が響き、不良のヘッドグループがスタートした。

## 第十一話 レース（前書き）

あー…学校行きたくないねえ…  
今回はいつもより長め。

## 第十一話 レース

最初の空砲の五秒後。Hリィ上空へと空砲を放つ。

同時にパンツと、合図の音が鳴る。

瞬間。狸が疾駆した。

瞬時にチェックポイントへと近づく。すでにチェックポイントを叩き終え、その場を後にしているワジ＆ヴァルドには追いつかなかつたが、早い。

『へつ…………は、早い！狸選手早すぎます！リア選手が置いてけぼり……いや、足を止めた！？』

狸の後ろリアはで足を止め、何事かをぶつぶつと呟く。

「天にましわす空の女神よ以下略……壁よ」

そう、小さくつぶやくが特に何も変化があるようには見えない。が、リアはそれで満足したように一瞥してから、チェックポイントを通過して戻ってきた狸と合流。そのまま次のチェックポイントへ向かう。そして、次に出発した支援課メンバーの一人が不思議そうな表情を浮かべながらも、ダッシュ。

突如、何もないところに壁にぶち当たったかのようになじみもありついた。

「な、なんだこれ！？」

「リアの奴がやりやがつたのかー?」

そして、一瞬だけ薄く、透明な壁のよつたものが視認でき、それが砕け散る。

相変わらずふざけた詠唱だが、効果は結構なものだ。薄い、視認もできない壁を出現させる。

「時間がなくて即席だつたから、認識されてたら簡単に突破されたのだけど…」

「そんなことよつ、来るよつですよー。」

田の前を見るとまだ遠いがチェックポイントの前にワジと、大きなドラム缶を担いだヴァルドがいた。

「ゲイ扱いしたこと後悔させてやつりあー。」

まだ根に持つてゐよこの人。

「どうします?」

「…私の後ろについて。合図を出したらチェックポイントを」「了解です!」

何をするかの説明もしていないのにそれだけで納得してくれる狸。おそらくリアの事を信用しているのだろう。うん。あの変態チックなところがなければ普通に有能で使える人間なのに…などと、ぼやきながら田の前に集中する。

そしてかなり近くにまで近づき、ヴァルドがドラム缶を投げようと力を込めたところで…

「ホロウスファイア!」

「なつ！」

瞬間。リアの姿が搔き消える。光の屈折を利用して、自らの姿を消す事が出来るアーツだった。よくよく見れば完全に姿が消えるわけでもないので見破られるが、今回は不意を突いてそれをカバーした。そして、ドラム缶を投げつけるタイミングを失ったヴァルドの懐へと近づき、再び姿を現す。

「狸！」

そう、合図を出しながら、ヴァルドの鳩尾に拳を沈める。うめき、崩れ落ちる。が、すぐに立ち上がるだろ。

ただ、隙はできた。その脇を狸が駆け抜けチェックポイントを叩く。リアはそのまま、ワジにも攻撃を叩き込もうとしたが…

「さすがにそこまではやられないよ？」

「おつと…」

逆にワジのけりが飛んできたのでそれを躱しながらその場を後にする。これでトップになった。しかも、ワジ達は後ろから追いついてきた支援課の一人と交戦に入つたらしく、武器と武器がぶつかり合つ音もした。

「ヴァルド…あれで終わつたと思うなよ…つー」

「まだ白髪扱いを根に持つていいのですか？」

「あの時あなた居たつけ？」

「見てましたから

「なるほど」

そのまま疾駆し、三つ田のチェックポイントも難なく叩く。途中

で不良一人組とすれ違つたがそのまま素通りした。…いやリアがヴァルドに足払いをかけていたが難なく躱された。根に持つてるのはお互い様だ。

そして、一周し終わり、スタート地点にまで戻る。そこでグレイスの実況がリアの鼓膜を振るわせる。

『おーっと！今のところトップは意外や意外！…えーと…何チームと呼べばいいんだろ？』

「えーと…一般ピーポーズ？」

「ネーミングセンス壊滅的ですね」

「黙れ変態」

『しかも、走りながら即興漫才をやるほどの余裕！…何者なんでしょうな。一般ピーポーズは』

なんかギヤグ狙いにしても面白くないし、言いにくいし、かつよくもない名前である一般ピーポーズが定着している事実はさておき、再び一つ目のチェックポイントを叩く。そこで再び折り返そうとしたところで二つの走つてくる影。遊撃士の一人だ。

「小細工はきかなそうよね…」

「ここは貴方にお任せします、私はお先に」

「ええー…女の子を見捨てるって男としてどうよ？」

「はつはつは。適材適所です」

「…むなしくならない？男で年上のあなたより女の子で年下の私のほうが強いって事実」

「……それはそれでいい！…」

何がツボに入ったのかは知らない。考えたくもない。

「世の中には逆リョナというジャンルがありまして、簡単なところ  
で言えば、女性に股間を蹴り上げてもらったり…」

「あふん」

生理的嫌悪から狸を殴り飛ばす。奴は幸せそうな顔をしながら星… そうマジで星になつた。リアの脳内でキラーンという擬音が響いてくる… ふむ… これがギャグ補正… そこで気づいた。

気づいたらエスティルの武器である棒が田の前にあった。それをギリギリのところで長剣で受け止める。

しかしそれだけでは終わらすは  
振り上げていてヨシュアがいた。

「うへ、うへ……」

その波状攻撃を銃剣で受け止める。が、さすがにベテランと言える遊撃士一人の一撃は受けきれず、しりもちをついてしまう。その隙にチェックポイントを通りながら、シユエスは先へと向かう。

「ああもう！仲間割れしてる暇はなかつたのに！」「全くです。今度からは気を付けていただきたい」

すぐ隣に狸がいた。

「あなた星になつてなかつたつけ?」

「あなたの一撃に『愛』があれば私は何度もよみがえる!」

「んなもん込めた覚えはない」

再び殴り飛ばしそうになるのを必死にじらえてから、すぐに態勢を整え、走り出す。そこからの一週目は特に特筆すべき」とはなかつた。リア達の順位が再び繰り上がり、順位は上から順に一般。ピーポーズ、ヨシユエス、不良ヘッド、支援課メンバーとなり三週目。それは狸が一つ目のチェックポイントを通過した時に起きた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

そんな獣のような雄たけびとともに、ものすさまじい闘気。びりびりと肌でその威圧感を感じる。リアはその感覚に覚えがあった。

「ウォークライ…ランティの？」

ウォークライ。獵兵たちが使う、自らを鼓舞することで爆発的な戦闘能力の向上を約束させる技。

「どう思つ？」

「私はランティさんのウォークライを見たことがないので何とも言えませんが…元獵兵たるみつしいの話だと、結構なものだと」

「そう…急げ」

ウォークライでの戦闘能力の向上は個人差がある。つまり、今ウ

オークライを使つたであろうランディの戦闘能力は未知数。やはり戦うのならば相手の戦闘能力をあらかじめ知つておきたいものなのだ。そんな思いで一人は走るペースを上げ、二つ目のチェックポイントを叩き、振り向いたところで…。

「うわあ…」

まだ、距離はあるものの、ここら辺はまっすぐな直線なので遠くまで見える。先頭はヨシュエス、次に不良ヘッドWで一番後ろをランディが非常に獰猛な笑みを浮かべながら突貫し、その隣でロイドが追走しているのが見える。やっぱ結構怖い。

リアは軽い恐怖を脚力にかえて走り出す、ヨシュエスとすれ違つたがこちらもランディに追いつかれたくないからか互いに妨害はせずにさつさとチェックポイントへと向かう。

そして、三週目の三つ目のチェックポイント。つまりは最後。さすがにここで妨害しなければ相手にトップの座を譲る事になると思つたのだろう。ここが正念場だとして、ヨシュエスが武器を構える。

「しようがないから正面突破！」

「了解です…戦技、闇隠れ」

了解と言いながらも狸は相手に襲い掛からずに気配を消し、姿をも消す。リアはそれを見やりながら一人へと突貫。ベテラン遊撃士の一人を相手取る。

「ふふん。一人で勝てると思つてゐの？」

「さあ…どうだろ？」

長剣でエステルの胴体を薙ぐが、エステルはそれを軽く受け止め、

棍棒を連続で突き出して反撃。しかもそれを大きく後ろに跳んで躰したと見るや、そうなるのが解っていたかのように着地地点にヨシコアが待ち構えており切りかかってくる。しかし、それぐらいは読めている。あっさりとヨシコアの攻撃を身を低くすることでかわし、余裕の表情を見せた。

「いやはや、ほんと見事ね…息ピッタリ」

「そればぞうも!」

再び互いに打ち合おうとしたところ、わきから乱入者が現れる。

「ひりあつ!」

「僕たちも混ぜてもりあつか」

その一体二の戦いに不良ヘッドの一人も混ざり、完全な乱戦模様となる。

そんな中それを無視してチョックポイントへと向かう影。…ロイドだつた。

その判断にリアは内心で疑問符を浮かべる。ゴールへと戻るには、またもや乱戦の中を通過しなければならないのだが、そこを通るのに後はゴールすれば勝てるといった人間を簡単に通すだろうか?否だ。結果的に乱戦を形成していた人間たちの目標がロイドへとシフトする。

それが狙いだとも気づかず。

最初に気づいたのはリアだつた。

「ロイドだけ……ね……してやられたかな」  
しかし、もう遅い。

「ヒヤッホウー！食らえ！」

屋上に駆け上っている一人の赤毛。それが上空より強襲。ロイドを除いたその場の人間たちがまとめて吹き飛ばされる。

「ぐつ……」

リアも例外ではなく、ガードは間に合つたものの、すぐに立てそうにない。周囲もそれは似たようなもので、それを一警したランディが背を向ける。

「ロイドー。今のは行かせー！」

「あーー！」

そして走り出さうとしたその瞬間。虚空より声が響く。いや、声だけではない。突如あたり一面に煙が蔓延する。

「ゲホッゴホッ……催涙ガスか！？」

催涙ガス。相手の涙腺や嗅覚の細胞を刺激し、涙やら鼻水が止まらなくなる化学兵器。そしてそれを使つたのは……

「ふふ……油断大敵ですよ。ランディさん？」

「なつ……」

「ランディーー？」

ずっと姿を消していた狸が姿を現す。奇襲するのに最高の機会が訪れるのを伺い、そこに催涙ガスを使うことやりて奇襲成功の確率を上げる。

結果は成功。ランディは普段なら余裕で受け止められるであろう忍者刀で一撃をスタンハルバートでかろうじて受け止め、膝をつくことはなかつたが、動きに支障があるぐらいのダメージがとおる。

「ゲホッゲホッ…つち…やつてくれるじゃねえか…」

「ハンター・ハンター三巻を読み直していくことですね」

狩りは獲物を狩った瞬間が一番危険なのだ。

それはともかく、動きが鈍ったランディを体勢を立て直した各チームが追いかけ始める。その中でも一番ゴールに近かつたのは支援課メンバーとリア&狸だった。この二チームだけはすでにチェックポイントを通過しているので直接ゴールに迎えるからだ。そして結果は…

「おおっと…一位は…えーと…どっちだろ?まあ、一般ピーポーズと支援課メンバーの一チームが同着一位!それに続いて残りの一チーム同時にゴール!何ともパツとしない結果でしたが、皆さんお疲れ様でした~」

そんな感じで、レースは終わった。

「ふつはあ~運動後のジュースが美味しい…」

あの後は適当に解散し、狸はグレイスとかいう新聞記者とトーク。じゃなかつた。情報交換に行くといつので分かれた。他は知らん。それにしても久々にいい運動をした。こういうのもたまには悪くない。リアは東通りで買ってきたジュースを飲み干しながら自分の家であるおとぎのマンションへと帰宅しようとする。

「あれ、リア？」

「おろ、支援課メンバーの諸君？」

マンションから出てすぐのところにその男女の集団はいた。とりあえず距離的に一番近いロイドに問いかける。

「どうしたのよ、『んなと』の？」

「いや、さすがに体力が尽きた……」

「情けないわね……」

「どうか何でリアはぴんぴんしてるんだ……？」

確かに旧市街中を走り回ったのにぴんぴんしているのは不思議だろ？。

「みんなよ

なんか全員に「はあ……」って同時にため息をつかれた。そしてジト目。

「ええい、都会っ子め……やっぱあれか！？都会の人間はみんな冷たいのか！？そんな冷たい視線で見ることでしか答えられないのか！」

「それ以前にあなたの言動に問題があるかと？」

ティオちゃん酷い。

「はあ…今は「きみお姉ちゃん」私はもう都会の荒波にもまれてもうくたくただよ……まあ、それは別にいいわ。それで何の話してたの？」

「さつきヨシュアとエステルが黒の競売会つていうのがあるつていのを教えてくれたのよ。リアは何か知ってる？」

あまりにもさうりと姉が死んでいるという身の上話をしたが、あまりにもサラリだったので全員が聞き流す。そしていかにもダメもとで。と言つた感じでエリイが聞いてきた。

「うん。知ってるわよ。それがどうしたの？」  
「知ってるのか!?」

その場の全員が目を丸くしていた。支援課メンバーはリアの事を各地を旅してきたとはいっても普通の一般市民だと思つていてるのだわ。

「ルパーチュ商会主催のオークション。毎年各地の有力者を集めて生誕祭最終日にやるのよ。会場はえーと…クロスベルのツートップの片割れのハルマゲドン議事長だかの別荘…」

「ハルトマン議事長だと思つわ…」

「あれ、そうなの？」

エリイの指摘。ちなみに「」とは狸の報告にあったことである。狸の野郎つ…！相変わらず男の名前へ関しての記憶能力は問題だ。

「んでそのハルトマン議事長の別荘で毎年開催。出品されるのは盗品とか曰くのあるものばかり。わーお。犯罪臭がプンプンするわね

「…………」

「ま、止めるのは無理だろ」ハナ

「何でだ？」

特にクロスベルの事に詳しいわけでもないのであるハナティが聞いてくる。

「だつてこの自治州のツートップの片割れであるハルトマン議事長が協力してゐるよ。警察じゃ無理でしょ。権力アタックでつぶされるわよ」

「だつたら遊撃士は……」

「遊撃士はあくまでも市民の味方。直接一般市民に被害がない限りは動くことはできない。あれって盗品とか黒い物を扱つてるって言つても要するにただのオークションだもの」

ほんと上手くできるわね、これ。内心でそりゃく。

警察には権力と言つ盾を使い、遊撃士に対してはルールで縛る。

……縛るという単語を思い浮かべると同時に女の子を縛つてあんなことやこんなことを……なんてことを妄想を脳内で垂れ流したリアはもはや末期に違ひなかつた。

「まあ、そのほかにも各地の有力者が集まつてゐるから、別の有力者にパイプを作らうつて人も多いみたいだけど……えーと? 何で私はいかにも怪しいものを見る目で見られているの?」

代表してロイドが言った。

「リア。君はなんでそんなことを知っている？遊撃士のベテランであるピシュアやエステルでも知らなかつたようなことを」

「ん、噂」

「どう考へても噂レベルじゃないだろ」

### デスクニー

「だから前にも言つたじゃん？私つて身喰らつ蛇の執行者なの」

「そもそもその身喰らつ蛇つてのはなんだ？」

「私の自作小説に出てくる悪の犯罪組織。それは影からゼムリア大陸を動かすと田々暗躍をつづけ……」

「」「」「はあ……」「」「」

「おい。だから階でシンクロしてため息つくな。確かに自作小説つて部分は嘘だけだ。」

「冗談はそれぐらいにして、特に深い意味はない。知り合いが情報屋を喰んでるのよ」

「そうだったのか？」

「うん、それだけの事よ」

純度100%の嘘である。

しかしロイドはそれで納得してくれたらしく、そうか…といった顔をする。

「もついい？」

「ああ、そうだな。問い合わせるような言い方をして済まない」

「気にしてないわよ。ま、私が知つてゐる黒の競売会についてほこのぐらしね。と言つ」とで情報料として代金を頂こうか

「…そういうのは最初に言つべきじゃないのか？」

「…そういうのは最初に言つべきじゃないのか？」

「ウソに決まってるでしょ。口ハでいこわよ。やじまで//リに困つてないし」

言つて首をすくめる。

「ま、なんかあつたら聞きに来て頂戴。もしかしたら力になれるかも」

「そりだな……もしもの時は頼りにやせてもいいわ」

「そりか。それじゃあ、バイバイ」

そう言い残し、今度はアリタはおとぼけのマジックと帰宅した。

## 第十二話 リーシャとの「」対面

「ん…？」

レースがあつた翌日のこと。生誕祭二日目。リアはふと読んでいる本から顔を上げる。

「お隣さん…帰つてきた…？」

リアが本を読む手をやめた理由。それは隣の部屋から響いてくる物音にあつた。

実はいまだにリアはお隣さんと顔を合わせてなかつたりする。なぜかと言えば、お隣さんが早朝に家を出て、夜遅くに帰つてくるというのを繰り返しているからだ。

朝は大抵の場合まだベッドの中だし、さすがに夜遅くに誰かの家を尋ねるほど常識知らずでもない。

しかし、今はまだ七時。微妙な時間帯ではあるが、これを逃すと何時挨拶に行けるか知れたものじやない。と言つわけで部屋で過ごす時は下着派であつたリアは痴女の称号を得ることを回避すべく、私服に着替えてから軽く身だしなみを整える。そしてから部屋をでて、五歩で隣の部屋へと到達。そしてノック。

「こちにちはーー結構前に隣に引っ越してきたリアちゃんでーす。  
挨拶に来ましたー」

その数秒後に中から一人の少女が立て付けの悪いドアを開けて出でくる。

胸でつけえ…揉んでみたい…

これがリアのお隣さんへの第一印象だった。中年のオヤジっぽい。が、それを顔に出すような単純な人間でもない。そんな第一印象を心の奥底に仕舞い込み、友好的な笑みを浮かべる。

「どうも、初めまして。私はリア・ルアルディ。一週間ほど前に引っ越ししてきました。以後よしなに」

「あ、ご丁寧にどうも…リーシャ・マオと言います」

そして、リアはお隣さん…リーシャの表情を見つめ…「？」と疑問符を浮かべた。

なぜ、こんなところに？

リアがそう思つたのではない。リアはリーシャからそんな感情を読み取る。表情の変化はほとんどない。しかし彼女の息づかいや、こちらを見つめる仕草、その他もうもう…それらを統計して、そんな感情を向けられていると判断する。別に感情が浮き出るのは顔だけというわけでもないのだ。それともう一つ。

裏社会に関わるものについて回る独特的の雰囲気。それが僅かに滲み出でていることにも気づく。

直接の戦闘に関しては執行者内低レベルだったりするものの、人を見極める観察眼や、頭の回転。軍隊の指揮官としての才能やらに關しては執行者一の彼女。そうそう読み間違えるとは思えない。

裏社会関係の人で、私に関わりのある人物。検索をかけてもこの少女に関しての事は全く記憶がない。というかこれだけ印象的な胸…げふんげふん。印象的で綺麗な顔をしている少女を早々忘れるとは思えない。

「ねえ、私たちつてどこかで知り合つたっけ？」

「とりあえず何かヒントを聞き出せないかと質問。」

「いえ、初対面だと思いますけど…」

嘘だな。とこれまでの人生の経験からそれを見破る。私に嘘をつきたいのならオズボーン宰相並みの鉄仮面を身に着けてから出直すがいい。

さて…となると私は相手の顔を見れる状態ではなく、相手からは一方的に顔を見られた状態で顔を合わせたことがある…？多少こんがらがつてきたが、ふむと内心で考え込み…

銀…だつたりしないわよね…？

以前星見の塔であつた凶手。それならこちらが顔を覚えていいの仮面のせいでそもそも顔が見えていなかつたから。だけどあつちからは顔を覚えられた…と納得できる。

でもなあ…この巨乳をあの黒衣で隠すのは無理があるよな…と、お腹より上で肩より下にある脂肪の塊をまじまじと見つめる。

「あの…」

あ、見てるのばれた。ジト目で見られる。初対面（？）で胸を見つめるつて…うん、変態チック。なので反省してからこの件はいつたん保留しておぐことにする。

「…失礼。とりあえずお隣同士よろしく」

「…はい、そうですね。よろしくお願ひします」

多少引き気味であつたが笑顔で返してくれた。おお…ティオちゃんを筆頭とした絶対零度的視線や、遊撃士協会を筆頭とした敵意に満ちた視線ばかり受けた私にとつてはかなりの癒し…いい娘だ…ちょっと感動する。

この子とは仲良くやりたい。リアは単純にやつ連ひ。だからいつ提案していた。

「ねえ、夕食まだなら、今からどこかへ食べに行かない？親交を深める意味もかねてさ」

「あ、はい。いいですよ。ビリビリします?」

快く承諾してくれたリーシャに対しても五秒ほど黙考。

「…トローティとか?」

「何のお店なんですか?」

聞き覚えのない店名だったのか首をかしげるリーシャ。

「バーよ」

「…リアさんつて未成年ですよね…?」

「細かいことは気にしない。いいじゃなこのよそのぐらー」

別名ワジの根城のバー。テスタメンツのたまり場。ワジとは立場を抜きにすればそこそこ気が合つんだよね。うん。

そんな結構入り浸つていてるそこそこお気に入りの店だったりするのだが、結構真面目じりじりリーシャが難色を示す。

「えと…お酒はさすがに…」

「あ、そう…それじゃあ、リーシャのおすすめは?」

「私ですか？ そうですね… 龍老飯店なんてどうですか？」  
「えーと… ああ、田市街を出てすぐにある中華店だったっけ？ うん、  
いいわよ。そこそこよっか」

ちょっと準備してくるから待つって。そういうって、いつたん部屋  
に戻った。

リーシャは内心では驚いていた。

何故驚いていたか。それはあの時星見の塔で出会った少女が隣の空き部屋に引っ越してきていることに関するだ。

今日は珍しい事に本番の後の自主練もせずに早めに帰宅。そして、部屋に戻つたと思ったたらお姫さん。しかもそれがあの時の少女だったのだ。おそらく、ここ数年でただ一人、『銀』としてのリーシャに傷を負わせたリアに。

騙し討ちだつたとはいえ傷を負わせたのは事実。そして、手加減できるほどの余裕。リーシャが…いや『銀』が警戒している人物の一人。

そんな相手なのだが…

「むう…別に少しお酒を飲むぐらいいじやないか…」

そんな風にぐちぐち言つているリアはちょっとだけ破天荒な年相応な少女にしか見えなかつた。

しかも「こ」もかしこも隙だらけであり、今の何の装備も持ってきていないリーシャでも容易に殺してしまったなぐらいだ。いやしないけど。

「こ」は龍老飯店という飲食店。なぜこんな風にぐちぐち言つてゐるかと言えば「こ」の店主が未成年の飲酒はダメ絶対。という人物だったのですの注文を受け付けてくれなかつたからだ。というか当たり前である。

「やっぱり、未成年なんですからやめた方が…体に悪いと思ひますし…」

「でもやーまあいいわ」

出してくれない物はしようがない。そつ割り切つたらし…。

「あとでトリー二ティ行くから」

まだ諦めてなかつた。それに対してもリーシャがやはりやめるように促そつとしたところで、「こ」の店主の一人娘兼ウェイトレスであるサンサンが料理を運んでくる。リーシャの「こ」クロスベルに來てからの最初の友達でもあつた。

「はい、お待ちどうさま。龍老炒飯一人分ね」

「お、おいしそう」

「でしょ、お父さん、料理の腕は一品だからね」

そう笑顔で受け答えしながら、手慣れた動作で料理をテーブルに並べていく。そして、それ以上の言葉を発することなく、忙しそうに去つて行つた。ちょうどお客の入りがピークの時間なのだろう。

「中華料理があ…あまり食べないのよね

「やつなんですか？」

「うそ。基本和食なのよね。味噌汁に焼き魚に漬物に白米」

やつ言いながら、ぱくぱくとおにしあつてチャーハンを平らげていく。リアを前にリーシャもチャーハンを口に運んでいく。相変わらず美味しい。そして、口にチャーハンを詰め込んだ状態でリアが言つ。

「ふおうこへばふにーふあはふおふおはふあひふあふお?...さあ、私は今何と言つたでしょ?」

「...『そろいえ、リーシャはどこから来たの?』ですか?」

「すっげえ...まさか答えられるとは...」

「分からないと思つよつな問題を出さないでください...」

リアは本気で驚いているのか目を丸くしている。そんなリアの質問にリーシャも答えた。

「私は共和国出身ですよ。最初は旅行で来ただけだったんですけど...」

「共和国...ね...」

なぜか意味深な感じでそう呟いていた。あくまで独り言つぽかつたのでリーシャはそのまま続ける。

「イリアさんに捕まっちゃいまして、今はアルカンシェルでアーティストを...」

「イリア...どこかで聞いたような...?イリア...イリア...あー...あー!有名なアーティストなんだっけ?今アルカンシェルで公開してる劇の主役」

「はー。そうです」

「すごいものね…私と違つて有意義な仕事だ」  
「ええ、本当にすごい人です。イリアさんは」

リーシャはどこか満足げに答える。自分の尊敬している人物がほめられればそれはうれしい。だから、リアがけ、一瞬だけどこか羨むような表情を浮かべたことには気づかずについた。

「へえ…じゃあ、リーシャも有名人だつたり？」

「いえ、私はまだ新人ですし…リアさんはどうしてここにいらっしゃる？」

「ん、私はもともとここ出身なのよ。ゼムリア大陸をあてもなくグルグル回つて今は里帰りつてところかしらね、国によつて文明の発達とか全然違うのよね。驚いたわよ」

「そうかもしだせんね」

「うん…あ、そうそう。リーシャつて共和国出身なのよね」

「はい。そうですけど…？」

そして相変わらずのどこか気の抜けた笑みで続きを語つ。

「それじゃあ、銀つて人のうわさを聞いたことないかな？」

「…え？」

思わず絶句する。それをリアはきょとんとした表情で見返し、次にどこか気まずげな感情を浮かべる。

「あー…なんかまづかつた？」

「あ、ええと…何でもないんですけど…なんでも」

「そう、いや、『めんね。変なこと聞いて…つと、』」

いつの間にかリアの皿の上に載つていたチャーハンがすべて消えていた。リーシャも後一口ほどだったのでさつとと平らげ、どこかそ

「つさまでしたと言つて箸をおく。

「なかなか美味しかつたわね」

「…あ、はい…そうですね…」

「どこか重い空気。ふむ、と考え込むそぶりを見せ、リアは「」の空氣にふさわしい、トーンを落とした声を出す。

「実は一目見た時から思つてたんだけど…」

「…なんでしょう」

まさか銀であることがばれた…？いや、そんなことはないはずだ。証拠も何もない。それに、この人には正体を見破られたくないなかつた。まだ短い付き合いだが、今この食事を共にした時間は楽しかつたのだ。

自分の正体がばれて、嫌われてしまつたら仕方がないと割り切れる程度の細い糸ではある。しかしリーシャはリアに対してそこそこ好意を持ち始めている。嫌われたいとは思えない。

そして、彼女は口を開いた。

「どうしたらそんなに胸が大きくなるの…？」

「…はい？」

予想斜め上と意つて明後日の方向の質問に思考が停止する。

「いやや…なんといつか…その…コンプレックスを…」

「ええと…」

「つぐう…」れも遺伝なのか…？お姉ちゃんもあまり大きくなかったしなあ…」

「その…これはこれで肩こりが酷いですから…むしろ気苦労が増え

て…」

「あはは…[冗談]冗談。本気で聞いてるわけじゃないわよ」

目が本気なのだが。

「あ、帰る？ 食べ終わつたのにいつまでも屈座ついたら迷惑でしょ」

「それももうですね」

そういうて立ち上がつたところで、リーシャはふと懇う。  
もしかして嫌な空氣を消すために突拍子もない事を口に出したの  
だろうか…？と。

しかし、それはまだ出来つてから一時間と立つてこないリーシャ  
にはわからなかつた。

いつたん家に戻り、リーシャと別れたあと。もう外はすっかりと暗くなり、殆ど光のない旧市街ではそこそこ星が綺麗に見える。そんな旧市街のとある一角にリアの姿があった。

「狐。いる？」

「ここに」

そういうて現れたのは狐面の男でどこにでもいる普通の町娘にしか見えない少女に対して跪く。全身が隙だらけであり、もし初対面で、彼女が暗殺等のターゲットとなつたらチョロイ任務だと判断し油断してしまいそうだ。

しかし、狐は分かつていた。それは擬態であり、演技。そりやつて相手を慢心・油断させ、奇襲するための彼女独特のスタイルだということを。

そんなリアは余計な挨拶等の一切を省き、本題に入る。

「リーシャ・マオ。知ってる？」

「はい、アスノリア様の隣の部屋に住んでいる大変よい乳をする女性で、」  
「……」

リアは軽い同族嫌悪を覚えつつも、狐の話に耳を傾ける。

「それと只今公開しているアルカンシェルの劇において副主演を演じているとか……」

「へえ……本当に有名人だつたんだ……まあ、それはいつたん置いといて、確証はないけどリーシャはたぶん銀の正体だと思う。共和国出身らしいし、ちょうどあなたたちが報告してきた銀の出没時期とも一致してる」

「…ふむ」

「ううじつてしばりく考え込み…ぱつじとつぶやく。

「裏では孤高の暗殺者で中身は美少女…萌えますな」

「…そうね」

なんとも残念な主従である。今度は結構本氣で同族嫌悪を覚える。こいつと言い狸といい、なんで致死軍にはこんな人間しかいないんだろう…。一応これさえなければ有能なので、今のところクビは思いどどまっているのだが。

「して、なぜそれを私に?」

「ん、一応知らせておこうかってね。ただ確証がないから、もしかしたら可能性があるかもってぐらいに思つておいて」

「承知…調べますか?」

「それはしなくてもいいわよ。別に銀と敵対関係にあるわけでもないし、それに…」

「…いたん言葉を切る。

「諜報つて言つのは誰にも知られたくないよつな秘密を暴く」と…仲良くやりたいと思つてる人にそんな最低なことはしたくないわよ」

「…そうですな」

「…いや、彼が統括している致死軍の人間の者は、誰もがこの仕事が人として最低の行為だとわかっている。しかし、それが必要になることがあるというのも確かなのだ。」

「…それだけ、お疲れさん。そう言い残しリアは歩き去る。そして狐も虚空へと消えた。」

第十二話 リーシャとの「」対面（後書き）

重 大 発 表！

：ストックが切れた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2726z/>

---

狂った少女はただ笑う

2012年1月13日13時46分発行